岷江入蜀

巻下

若菜下

四十一歳

衛門督奉念女三宮為病事

三月廿日六条院弓会事

衛門督参春宮女三宮御猫給事

同愛猫給事

螢兵部卿娶真木柱君給事外母大宮取持給事

四十二歳

四十三歳

四十四歳

四十五歳

四十六歳

此巻の詞にてハおほつかなき年月もへたてゝうちつゝきたる准后

かつ世をさめ給ふ事十八年になりぬ世継ひぬとし冷泉院御位下

つ世をさめさせ給ふのこと〳〵しきまて十八年まて行ふと継ぎて

源氏四十二より四十六まて年歴てうつるしるへし

これらの年月もさたかならてこと詞のうちにみえたるなり

主上譲位事　今上とし
太政大臣上致仕表事
髭黒右大将任右大臣為摂録事
六条女御腹一宮立坊事
夕霧右大将任大納言事
十月廿日六条院住吉詣事
女御殿対上同車事
明石御方尼上又同車事
奉女三宮叙二品給事
紫上養明石御腹女一宮給事
以致仕養大将典侍腹三君給事
為明年朱雀院
源氏奉教琴於女三宮給事

四十七歳　今上在位
正月十九日女楽事
明石上琵琶　紫上和琴　明石女御箏　女三宮琴
御方々花喩事
源氏君与夕霧大将音曲事
其夜源氏君渡紫上対給御物語事
むかし御事語給事
紫上ことし卅七に成給ふへし　みえたり二三の御遠慮あり
ほとは巳十九にあまりまゐり
夕霧渡女三宮御方給事
自暁方紫上痛胸給事
御賀延引事　二月中不参渡事
三月紫上渡二条院給事
衛門督任中納言嫁娶朱雀院女二宮事　落葉宮是也
衛門督招語小侍従君事
四月十余日御禊前夜衛門督密通女三宮事
祭日衛門督独吟歌事　落葉宮哥事
六条院渡女三宮之間紫上発又絶入仍立帰事

物気出現事
紫上御受戒剪額髪事　六条御息所霊也
六月比紫上少減事
女三宮自四月比懐妊事
源氏渡女三宮御方給事
衛門督文小侍従奉見女三宮則捧茵端給事
源氏求扇之次見付茵端文事
源氏渡二条院給事
小侍従以源氏見付文事語衛門督事
源氏又渡女三宮給事
二条内侍上出家事
源氏遣文有返事
朱雀院御賀依女三宮御悩十月又延引事
山御門送文於女三宮事
十二月十余日御賀試楽事
衛門督称病不参源氏召給事

衛門督試楽未終早出病悩事
衛門督離女二宮渡父大臣御所事
明石女御又生男宮給事　白家是也
女三宮御賀事

若菜下
此巻の名ハ上の巻とおなしく藤裏葉を何にかハいはんの方によれり
當流不用之
以詞為巻名也きまハ上巻にしるす也　此巻ハ六条院
四十一歳二月迄の事にハ上巻にしるす　同年の二月より十二月まて
みんなより四十二より四十七まてのことハ物語に不見なり
十六七の年ハ又此巻の中に四十七の年まて也　此巻の巻
云々なくて年月をつきなめて物の帝せんの給ひけり

兵
せ給て十八ばかりになりせ給ひぬとてかゝり　冷泉院　源氏四十
六歳の時御位をさりて世給へり是にて有し
其後の時に源氏の御年一より四十七まての事有此
まて上下にかゝりて事にして一川のまとしるすおほくはこゝにかゝりて
たてまつらし　院上ハ六条院の御事　下ハ朱雀院御事上下とも
若菜と名とせる心なるべし　上巻ハ異本にひなぶりと
有　小侍従かくいへるも此しこなるといひて　源四十一歳のこ
月より四十七歳のまてにあたれり　四十二の比より四十八まての
四ケ年の年比物語になしたる也　四十一より二月まての
事ハ上巻にあり　院下ハ上巻のまて二月のこと有し

みこゝろにはおほやけへまいらせんとおもひていへるなり
江　さまてかくハぬ桃なし
花　柏木の衛門督女二宮をたまひて小侍従かとかくへ
ましハ女三の宮に心をかけしさへ(に)おもひぬ桜のえ
とりいたましハまさにとけかれはおほくへたてさてめしとは
まし孫ハましてあはれなるよしとまての事の御とつきてとは
右衛門督の人をいへるなし
秘　小侍従がせうれにあひさきてし
いとやかなれてあく　少　小侍従にあくいへるはかりにて猫の事
院の御ためなりゆかし　秘　六条院し　少　前にまた猫かけていへり
大かたハ大将にちつ源氏の御為にはかりねんの出たるかたるかた
ゆかしむへといへり
院もあり御日ハくく　秘　三月十日しけよまての事院日二月
なほのかくらえ給りしはまて　源へうしつ女の歌かのう語
の折いめさうりなきむしんへといへるうくけあり
それおほりの(宿)の事　女三の宮はあきりの宮の事し

夜上ののりゆみさはうこそありしかるを

私 夜上の賭射三月の例をあはせて其の名ハ夜射とよふ正月にかけて

行はせられていつも三月の名ハ庭射とよぶ也 延喜儀

帝の后を御かへしありし九月九日にも三月にいくさと申しき

礼記に三日のことハ見えず三月の文なりし三月ありハ三

歳を毎にしる儀有文武右の時節冊をもて軍を起て

時執旋の法に從ふなりとせしこれまて商帝の三月いくさと云歳

有し晋穆帝の例なりしかは小軍を出ておこなはるゝ所なり其

終にハ九三月をとゞむるにはなれハ九月九日の宴を延喜帝の

正三月ありつるに十月にこそ行はれしこそ此事の義を合

付られなり後に桐壺の文をとりたり 文粹にこそ見えたり

秘 ふる金沢治承五年正月崩御あり高倉天皇の御代諸家に令合はす

江 西宮抄云夜上賭弓前後頭於夜上取方人弛丈不俟次仍改

書押小壁四府中點便所各為出居所々設饗定從陽師出居

一条門解除書召文紙史主上御射場射手着座王卿以下定

方人参前後参出居令懸的天取渡的付着座壽刺着座アロ方

方弘被仰渡数念人賭物主徒射勝方拜王卿以下主徒射追

出懸物卿アロ所々掌令書分前後所掌着的付座付座次々て躬

弓ぐくと有中科人着　李部王記天暦五年三月十六日殿

上賭弓忌月事　賭弓正月十六日於弓場殿射之四府乙々以下束帯着

やうひとつ御忌月なれハ　私 為もいまて

秘 然る為も此御忌月なれハ延引有し忌月と避例於為あり

後の献此御代十六日の節会 弊家有ふよりて行ふ有後

のるなれと例にひきり

此儀ふうしかまうる　秘 ひとつハ行ふなるふよりて深そ此有也

江 的射し 古今ふことをめぐるせる例ハつゝ歸と有分居から

ねりうり無しし詩にハ園乗なと継らすと今的射に行で見る

私若菜上のまふ柏木の夕帝と羽にふのやうかうれいとゆの

深信つまみ花のわるとされ給まての法ひつる紙表なとしみ

そて月のちく小弓とて也見えわかまへてかうしハ賭ら

と有此詞とし未なるへし　柏此注て小弓と也のひきて

うち弓の座てられ有るとあり

若菜上にい
とハ条居と
も見えたれど
又射ノ時か
ゝハ的小也
てこへり

左右はたゝさかにかなくとも　秘 髭黒ノ右大将しむかうへゆく
むとうふとくいひつゝしのゝたまわ　弄
まけわちたまふ　河 まけハ次ねるし中かねるし　秘
こゆことはわかりしかとうちゆことはなとをかしきる上よりとて
河 歩射　騎射　歩射　和名ニ加知由美
本 大歩射法云史射以自先領其持心射之　今案持心ハ的名
抄 李部王記天慶三年三月廿六日殿上侍臣於朱雀院歩射又
天暦四年十月十五日試春宮擬帯刀坊亮以下領試先試騎
射次試歩射
秘 うちうちなとにりふるのしるる上にならいゝこゆ射るとし
殿上人ものこりつかうまつり給ハ　殿上人の中にて射藝に達したるとなし
ましうえのくにゆうむかえてまさこそ
河 ちはれは後し　柏取合しとそたてふるし
秘 おほとくらくもとうとくゆ定めへなし
花 同右近ゆるりはれぬか　弄 若さ左右はわかとにゆらとえし
いうのさとうもうかれ　秘 三月朔日し

弓のけいふくかつてもやとてりうゆ
河 いとのことゝ絵三りぬけるつかうかつてもやとこえ弓のわりきりは
和歌のかうやゝ非衛しこふのかうと弓絵し
えんなるかけものとも　秘 わかさいうち出さする
西宮抄云賭弓淫進錢　自穀倉院進
出懸物 錢八持出給紳付リ　延喜廿　近衛　御厨取板出女裝束　中宮被出裝束
柳の葉をもゝたひあてつへき
秘 養由 養由もいひつへきとしなし
河 史記曰楚有養由基者善射者也去柳葉百歩而射之百發而
百中之左右觀者數千人皆曰善射
とねりとも　秘 とねりハ左右の近衛
秘 左衛の人なから
うけはりいとし　上よりおりゝゝくとりしみひて河くみへし
まなつこさいともつゝきそこまて　巨らしなし　花 大臣わたるかし
百たひあてつへきいつり衛府ふんとをなて見 柳の葉のかみを
すこしさハちやうなるし　射のかれかうちふあまうつりゆ緋とし

とらへさふにはらむて論語なとにて　付ハ不主華モといへり
大将の比より　　少　大将達し
へうきゝにおもむきし　つ　　秘　夕霧のこゝろしつめて
こたへいひつゝあゆく　　夕霧ハ柏木と知音なるに取さへ云
れいのゐくやうなるかり
けむしう絶ぬゆかしけとの　　少　萬ことに哀し
まれさへおりひつくめたしいふ人のほし
ころおさるゝみそて柏木にもくあそはんとかいとよく
くおりはてゐるに
夕霧のいつまりやうなるにて柏木の源をもとしくかくれゐてあるし
こけるも　　秘　いつくし
人とてん流布の本へさ　　河　古人銘冊に批點なとハいさてゐ(?)雲鬢志
ゐさんてさされハ點つけゐしさとハ人とかめそらるへきて
秘　人ゝりゆひとさう御へこゝゐるし
えもしさつはりてたてもありける　　初ら御ぬるとしいてんてとさん

おかしかるをしゐりして女三の宮とはしたなり
女御のけはひに　　秘　弘徽殿　いとよそのけはひにさし
あるかはなやかに　　見えぬさへいまゝいかにもてなしたるかにそとし
ゆかりなるにあやしく　　女三の宮のなるし
花　女三の宮はゆかりのひめきみにてもし
柏木のいかにハ不定にしおもひはかりにしろくこれ
おほしおもひはしされくるてあしくハ忘れなされぬと
秘　おほろけならぬことし
おほろけに　　花　東宮の御方女三の宮の御方にもし
春宮のおゐりのゝゐ
秘　女三の宮の御方にハ人すなれハ猫かよひもあはれ有へきさんてし
ろなりかけなり　　河　云論
日　東宮女三をやかに猫の事へさてし
さうかはの御さゝぬ
秘　春宮なとの御かうへとおちさはあらんことかり
しらのなにとし　　秘　いまのはかなくて
注　小右記云長保元年九月十九日着内裏御猫産子女院左大
臣右大臣有産養事有衛重院飯納官之猫乳母馬命婦時人

咲之斎恠奇也天以月若是可有徵欤未必禽歟用人乳嗜牛

河 寛平御記云寛平元年十二月六日 朕閑時述猫消息曰驪猫一隻太宰少弐源精秩満来朝所献於先帝愛其毛色之不類余猫〻皆浅黒色此猫深黒如墨為其形容悪似韓盧長尺五寸高六寸許其屈也小如粟粒其伸也長如張弓眼精日明瑩如針毛之乱眩耳鋒直竪如匙不揺其伏臥時団円不見足尾宛如堀中之玄璧其行歩時寂寞不聞音声恰如雲上黒竜性好道行暗合五禽常低頭尾着地而從聳脊高二尺許毛色悦懌蓋由是乎亦能捕夜鼠捷於他猫先帝愛翫数日之後賜之于朕〻撫養五年于今毎旦給之以乳粥豈啻取我能之翹捷因先帝所賜雖微物殊有情於懐育耳仍而曰汝含陰陽之氣備支竅之形心有寧知我乎猫及歎息挙首仰睨吾顔似咽心盈臆口不能言

古 内裏の御猫のうへはしめてかくなん

あまりつひさつましし

秘 猫の子のくるしさに[illegible]

大象院のかはたのはなつふ 柏木の酒にあそふの[illegible]

えたふ[illegible] ここもなさかぬつしさらし

猫こころしらぬ[illegible] 秘 女三宮猫とかくして[illegible]

うつくしき猫のおとなにあそふ[illegible] 秘 かくしくて[illegible]

ゆりうつくしかさるりいわ 秘 猫とらたて[illegible]

これらつかれにてまわ 秘 明石中宮よりの猫と女三宮こ

ひまつもしも 花

あはれ猫とよはひまさりこさて 秘 女三宮[illegible]

つこさよみすりうの[illegible]

朱雀院のうりは哉 柏木は朱雀院[illegible]

めしつついはつしなわ

えこのかりて 秘 女三宮

御猫とうりもたのみなれ 柏木女三宮[illegible]

いつものはしく 花

従 衛府猫と[illegible] 花 猫と女三宮[illegible]

三条の[illegible]

必 柏木の[illegible]

きりあつしこさ[illegible] 秘 女三宮の御し

事といはゞ物ならねバ　必 柏木の衛門督ハえ引きつゞきあかりのごとく
思ふ事もさすがの思ひと　ほのかなり思ひかけぬ猫ゆへ有ましきは
おもひ給ふとも柏木の心得へし　一流に此心は清らかにあり
思ひよらぬ事より思ひかけぬわざもいでき給ふといふ義は此流にいへ
人ごとに侍りし　秘 猫の傍身になれたるべし
猫ハ人にいとらうたげなる　聞 猫の声を音めかしく猫にハ音
なくともねうと鳴くなどいふ　抄 猫のなれたるさまはまことに見まほしや
うつくしさもいとゞむつか　私 猫のなつかしさにてあはれなる
右大将殿　しのびてあそびける折しも心にかなふかけこそさへ
見えてあそびけるにいふなるハ　猫のやうに思ひかくしさへなれ
恋といふもの心うごくなるさまハなかりし心もなかりけむ
或ハ此のこゝろはるけきなるべし　琴の音に聞なれる也
抄 なく猫ハ猫といふ名有不関之　花 只猫の音の猫とかあ
これにぞはかなく侍り　河 家有不疾
唐武宗之時宮妃後房為猫友ヤリ
まうけめしかたまひけむ心あり　まことに猫はすめられて柏

本の心をとりとをかへして
たまたまの心の方
大かたの思ひさらんよりも　一　物思ひつゝし　花
思ひしかぬなどし　花　秘 大方の思ひさらんハ思ひつゝ心のまゝの心
右大将殿のは　秘 夕霧しのびめハ源の宰相の君を有しむる
めでたくおとしく　秘 夕霧の此をいへり
まもりつゝの此をいへり　物思ふ心のかくしきハ思ひつゝの此を思
しけいさかいの　花 わかしの中宮の御心ある
秘 明石中宮ハ東宮の御子をなれたまふにしく事なきこと
さるとなる所にいけむ　御夕霧と夕霧方東宮の御方かくさるかな
おくしかるくしさるふりゆくかなしからんと思ふ
れやこころ　秘 紫の上をいて　まつりつゝ御大臣の御しらるへし
御帝たちのなる　秘 まもりつゝの御方にもあるなる心し
たいまつりの姫君の御　ことの心こゝれの御方の御心ありし
かはそれやかなる　秘 式部卿しもらにいらさりつの上もあるへし
此言の御めに　かれくしらの心のみのほかなし

こゝは作者なから　もと柏のかるへし
花 先帝ハ式部卿にてもと柏の母の兄也
必 式部卿ハ当代の后の父なり
此宮の御心なり
花 源氏　後ハ太政大臣
これ北の方の
花 髭黒大将
大将をさる世のおほえしりて
秘 何となくふつきそてしもと柏の君おもひかけるとし
姫君のとはえ
くるしけれたゝいたましく覚ゆめり　もと柏ハ北の方の事なるへし
ろし母の心わたり
秘 玉かつらし
花 もと柏の心はなるへし
あはれにもやさしうこそ
秘 ほかなるへし
れはしきろかたる程なるを
必 宮かつら御のよしもかなし
そのしやハあしらはく
必 さしいひてもなにかはならしかり
とのまかりかきしくるし
必 式部卿にこそやつかへりめるへし
何 式部卿宮の北の方
大かたのこゝは
必 式部卿宮の女御也
史 式部卿宮はらはらしいかゝ御母なし
花 式部卿宮のり　必 子ほり姿不審式部卿宮て姫君たちハ式

又てまつらなやしもりしらぬ式部卿宮の心は此さかの御事大事
のおとことにまかりしかはしらり
いかさまにかやうし
秘 思ひて此ゆへあるへし
さことあるまうさぬ事なれ　こゝハ髭黒大将なり
必 あまりの御心もなく　さて御ゆかりいつり
大かたやハ女こあまるし
秘 婦女ハ髭黒の室今ハ離別せらるゝ
王女御しとうめのもてなしかれ　あしし枕のかゝしに住かはかなし
みうちのそのかなしからし
花 式部卿ハ北の方桃柏のうへし髭黒にたまはらんと思ひけるなり王女御とて
内まゐりのかしし枕かゝ中にさふらはせ給ふなれは
あしとこそ　桃柏ハ大将と式部卿の北の方とりきりたる
花こそ　必 鬚黒ハ北の方の心の事なり
のこそしぬへかりて　さらかくしらの五つて
くて思ひもありやしきいり給
大将もさこそとうくいらへてこと　髭黒ハもと柏の君のことなし
うつれならんかうし　源氏ぬしの御心しゆかし
花 常葉へつりこの心をはいふへし
又ハうせしいひつかの方の

秘 宮たちなとてしるとの御方々にさふらふにいとゝ心ほそく心ひとつに給し
同 先帝の四の宮ハ二条の桐壺の上にあたらせ給ふへきをあやにくにや
后腹にてましますに前坊の御有りさまにかゝりたる御かたならむ 祢 富
わしくハおほ祢て けしき桐壺の更衣をかくれたまひしとかくおほしめし祢
うちても御かりのほともなかるへし
たゝや まことに桐壺の更衣の御事也
母后 秘 まことにいひしらぬ御有様なりし
しかもいとゝ世にかしつききこえ給ふ 桐壺の更衣の母のあはれなるに
なれハいかゝ思ひ給へはかりかたきに
大きさきもさしおかす 藤壺の御かたへまゐり給へはいとかなしく
つゆも人のゆかし給はぬ 藤壺の御かたにまゐらせ
かたち人にすくれて思しめすをあはれなる
りんの君 秘 宮の御事
かくありて心ひろくそ見えし 秘 此君にてあはれなる
よろつのことはりなる事ハふかきあはれなれとも心ひとつにてこそ
そのはてはすゑくさきこえ給ひて 御さまの御有りさまにて

こは人のひかりとそ見えけるとて源氏の君さまにさふらひ給し人
あらしと藤壺の宮やうに心ひとつのみにておほしめして
こひおもひしたまひしよりいよいようしと思ひける桐壺の更衣の
ゆかりなれハなにことも御つゝしみありてかくなりにけれハ中宮の御
事とおもひつゝさるへきことハ 必 藤壺の御事なり 桐壺の更衣の御かた
せうとの君にかへりなとして 必 桐壺の更衣の母北の方
兵部卿宮なり 桐壺の更衣の兄にてそおはしける 心ことに
の御母のふかく思ひし 秘 かくれもなくきこえたまひて
兵部卿宮は本院の宮の御母ひかりの君のいかにうつくしき
うつくしきかたちにてものしたまひしを桐壺にまゐらせたまひて
の男君そたつときは御母の御心のうちにひかりの君の
ひかり君にまゐりておほえのこと 兵部卿宮のおほえ
といへりけれハ源氏の君のおほえにまさるとそ桐壺の
うつくしきとそ

かねてよりはしめにこそさふらひけれ
前坊の大臣のむすめにておはします 是も兵部卿宮の御事也 桐壺の御母
なりけるへし

前なくてさるにといひてこし是ゟ小雨ふりてお遠に御名は之
みところちハ此ころふかく心なく　礼大なる御名
必 内へ参りせさしこめなるにへ参りけるふかけてねらひこゐさゝし
日 大将のかてし内へ参りせさしてこゝにまかるハさゝやかの雨御心や
ちくとてふかりしともくしてゐらかにし
私此詞大将といへるいりて大かたハさうらひていゐし
ことさらりなかりのかゆ　秘 花々てこゝし
古ハふかき絶なるかめらく　蛍兵部卿ハ昧気なるさく御からし
かくさし御こゝの御中よりく　必 二年ゆゝりてゐねまいり
此後右梅大長の宮りなりけり
もうれたこゐ年月もうらなりて　必 源氏の年十二にて御元服
ましてかる此内ふ有りし御右大臣の方かとの御子として御こゝ
御みの定まりつゝる此中に有へし
内のみこの此くていりつせかのかゐ十八年ふかせ給ひ
河 仁明天皇治世十八年 嘉祥三年八年まてありさせのゝ 今年ハ新帝の御代
宮ふかゝへ給ひし　清和天皇治世十八年 是貞観

無継嗣例
朱雀院 昌子内親王　後一条院 章子内親王 馨子内親王
花 冷泉院ハ源氏廿一歳の時受禅有りてその御年御在位のゝくしめ十八年 秘
源氏の年廿六にて八十八にて当代し十八年在位ハ清和天皇の御例
十八年の御例河海ありけれと源氏の十一歳ゟりに十七年まて掛かりぬ
十八年まてなかせのふとけり此頃は春宮のゝゆめてよりつかる
違て出家あるなりし冷泉院譲位今上即位源氏の年廿六十月に給
給てみこし御りぬの十七二月小安試楽十二月朱雀院の御賀のゝかに
て有冷泉院御譲位の次の年出給ひより十八年ふりまちく侍ふ
て給への年数とかくりへなるへし源氏の年廿六にかいける
無御ゆかりなし　花 冷泉のゆくし
流されけれ　秘 皇子御しまさらぬし
思ひよくゆかも　花 冷泉院源氏と申てみやうかてうやとの
まかゝるかりあふよりこの内の御ゆくこもりしけるへう給し
日 此ゆくとりしなりやうせ
河 给御業職脱屣操延喜例歟　李部王記

秘 陽成院院御悩脳の度ありこさ　花安

おほきおとゝしの御事　秘りしはまのうそし

太政大臣致仕の例ハあまたおはしまさねとたゝ大臣の大臣致仕てなひらへ

あいつり但天暦三年正月二日是太政大臣致仕表注中

精者若其有勅答不許之　見李部王記

花 冷泉院の御代に太政大臣関白しあらへ御諱をへりあらへ

うそ又職を辞して致仕ありしと　同云致仕冠とりてめ

一説云今より出仕をやめて隠居するなるを付冠しへまし

さらしゆきあけつらかふかりん

江 東観漢記云王莽居摂子宇

諫莽而莽殺之逢萌謂其友曰三綱絶矣不去禍将及人即解

冠掛東門去後漢書逢萌字子康北海人掛冠避世遯東陶弘

景神武門掛冠去

左大将右大臣　花 まつりごとをて

秘 いけらうし関白ありて

江 粟田関白道兼于時右大臣　秘 兼香反の女御殿上のうゝせし　損深

女御のうへてらしの御代

元方 今上の母女御し　花曰

うまりわる御法と　必 今上の母女御 冷泉院の御母なりしを

あらし給ひ　江 人のうへ

広幡の女御のつゝや　花 明石中宮の姉女御也

明石中宮し

右大将の君大納言にてまたいのたかまりのあね　元方の大将と有り

花 りう宮し

六条院ハとりわきてひめ　冷泉院のつゞき

秘 東宮の御うしろつきのやうなれハ源氏口をしくこひのそし

冷泉院と定めて御てをさけられいひしとて冷泉院と

中し給ハ冷然院とさしかくと此院にして火事ありさて冷泉と云

て火事なとしてひさしく冷泉院とも云とのゝしてまたあり只

みそしと思してとしあり安和し

花 帝王系図云弘仁十四年遷于冷然院十七日讓位於皇太子

天暦八年三月十一日改冷然院為冷泉院

江 冷泉院ハ次よりいへの北門冷泉院まてあらし池をされハ冷泉

院にておはしませは　冷泉院ハ大炊御門南二条北堀川西大宮東
四町累代後院焼滅天泉御寓此院弘仁十四年四月十一日
天皇遷冷泉院十七日譲位於皇太弟　遷淳和萬和元年八月
遷冷泉院天長十四年帝朝冷泉院嘉祥三年正月同仁寿三
二月晦日幸冷泉院覧桜花天暦三年九月廿八日陽成院以
冷泉院被奉朱雀院八年三月十一日改冷然院為冷泉院

おほしたちたれと此ころひなやうしきこゆるなるへし

秘　六条院のかたなるこそおほえのわさなハし
冷泉院ハ誠ハ六条院の御子なれハ系図にハ桐壺の御門の子
りまりなと院同し王統にはいとし陽成天皇ハ此母二条
后へハ業平中将まいりかよひつゝ清和の子とはいへと
誠ハ業平の子といふこといひつたへたりそれ一代ゆへにて
末の代にハ絶へまいりぬ冷泉院のうちに見えかくへたへし
にひかなやうしきこゆへきならねは　秘ひかなやうしきこゆへしハ
御子順にあひしたかひてあるへしといふ也
花　冷泉院のこゝろをかくはかりに源氏薨逝ありてもわ徒

まことにあるなりくわかへめ御代とつゝきおふやけなりし也
末の世まては　秘　末まてハ相続し侍へきさうなるへし
人々ハなにわれたるを　秘　源のひとつかたちひとつにて
おもしやの女御ハ　秘　明石中宮也十八にまいりて后に立給ふ
なりたなり　花
源氏ハかくて后かいのちにたゝるそ
河　宗家物語に源氏ハかくてこき后のいふあるハ表白の所の内にふる
め有しこゝろへあり　明石中宮の所かへるへし
弄　藤壺女院 先帝四宮 桐壺帝后　秋好中宮 前坊御女 冷泉之后　明石中宮 源氏御女 今上之后　是ハ源氏の
すてにいまゝてハいつり藤壺秋好ハ姪ともいふへき源氏もそれハ
あかれて皇后とハ皆源氏の子へゆるし後氏の家にあつかりきし
藤壺秋好明石中宮皆是源姓ハ何て源氏になるへし
河海ニ宗家物語にいへり
冷泉院の后ハ　秘　秋好也
ゆへなくてうし志ふれまゝハ　花　秋好のふるまひ源氏のいたくかつを
あるまゝ御くらゐとありつゝすゝめたまふとし

私ゆへたゝしとは皇子なくしてもかくもあるましきなとし
院のうちに
花 冷泉院の太上天皇へ御譲なるへし　秘 冷泉院なり
姫君の御事ハ　秘 女こなるへし
花 宿曜に
宿曜の御かうかへ　秘 女こハ今上の后にいはるゝ也
花 宿曜ハ今のよし
人のいはせられも　秘 内々にて大臣になるへし
おいのよはひにいさゝかも　徳イキホヒ　勢イキホヒ
必 されは太政大臣ハ極位とし
中のおとりハ　源し太上の御事也
今ハあなたもほりかたちをねたゝしくあめ　花 太上ハ源へ中絶
秘 此太政大臣ハ致仕さうしきあらんとあるあたりて行へきこときこと
此宿世のかゝりける也
わかれしく候もの　秘 源の詞
こゝろかれかひ宿世なれて　源この宿曜をあはれとし

此くゆりてさう〳〵しくとし　宿世とほかりてハさう〳〵しく
おほさんといつくし近つけるとし
宿世かゝりけん　上のおもてかくさめんかたもなくて国前の宿世の
かうんさほとらんハいふへしとし
源この内とのけたりん後　源氏出家の後かくてもかくいふへし
あてにしりやうに源のさ御事をきゝて
女御后にまつるこそ内にこそはや　秘 明石中宮も中宮の実
母のすくしのうへし
御子とハいられけれ　かうしのよてし
中くらいさん　明石上の今とゝめくぬ行さん女のうへとし
あつかひても　あらしのよにかし
めつらへのさひみかしらしへし　兄たゝ年とりゐるさへし
秘 かの月とのさひみかしらしへし
かの海とくみからふしこみとらみ子へりかゝ俗なるゝれまた色紙
あしてとるの絶しあしてしはなつきかしてとしるへし
同かくつなりてとくしるくらへきへし

ほうしのつねりけく

長保五年九月九日御堂関白 于時左大臣
随身堂家宗石清水并住吉給東遊神楽未有之
今案源氏君於具臺上参詣住吉可准之

もとこの末枝のゝくつみつきて世のいのり
花 明石入道相さもあらまし神のやうへし永世ハ末の世にまてといふ
抄 きりのけいさよひなくてハ
抄 天下の御物忌なくて御さうさ有りにたるしとかとかり
さはりしくなるへく 抄 おもへりゐしきよし
抄 神たちもさゐなりけむ
住神のこういまし 神たちのあらしき住神は納受有へし
なりしかと入道の夕暮御源のたのもしく
わすれつたへてあはれなく わすれしきう御しかて
しうのはつはてりて ほうきらんるあらしりうらいとし
抄 志くしありなてあゆみもやけしける世のことたいへ
抄 古実変化の神とし
神庭草木上二変化の神とまかせたまへし

抄 交趾大領花益女為發公惑生女子為葉香殿女御延喜帝
いかにいはひのんとありけり 源氏ハて
抄 明石入道のかけといはなくるあかのゝあるまうて 花
ういつさひの神さうつらひらし 抄 次席ちまし明石の后もうけの
神をいさ御つかひのまなくなとつくし あり
ろうとほくしのまつふるいまことよしまなかのるし
めいのようつしゆて 此字ほ例あるいふくありなり 花
抄 神前にてあり
大臣師こと御 右大臣ハ舞をして今一人ハ大臣内大臣師へ
まいへハ清女のりうけなくて 抄 ゆるあふとしあり
抄 舞人ハ十人ハ石清水賀茂の源付の宮のとく 大乗寺の宣付
陰陽とハ奇人と云十二人ハ陰陽六陰名ハ人てしまつて后の
そくれ御みさはうしつへくありゆみをうとをかこ人ハ加陰陽
とうきもよ清舞なとの神し 其日みなと清使の付舞人まて
しまう神あらみ(?)方しの陰陽ハおほく名清司し
花 同こ東柱の舞人ハ京の加陰陽ハいりやうの付くらし御かや

一執筆今世にても八情練付方の付陰陽頭のかには加陰陽頭とも
陰陽頭共備なとあかりてあるか　有青ハ岩石のたかと不被成るし
西いしらも　秘　さ推の事あめし
此頭ハ陰陽頭ハ士れ司也へし古日本人の陰陽頭ハ士れ司也あへし
賀茂氏付の試ニハ士れ司にてあるハ陰陽頭とはくハ士れ司し
様同く陰陽頭と申人へていふ事ありハ推すらしへさ也　一執陰陽
頭ハ陰付の方の付申へきにハ御意て二字をよらへと頭へかうて給や
さりつをゆかぬかめ　　例の如
必　加陰陽頭として陰陽の陰古書なとめしさらへるしてと有るし
左　加陰陽頭ハ士れ司の人へよるへあり　　御加陰陽頭二人ハ士れ司
らうゆうこれら　　御ホ家にも有士れの友人し
秘　陰古して社家有へし
左　社家の人数しみありとも人あり
内裏文院　　内今之　老宮あしゆき頭一家　院　陰泉院し
むしんで比をいふへんむよりあり
左　同之いりやしの事なりよりめけをや　馬副　随身　小舎人童し
筆之葛付ハ中つらへしてい

かくし之る副にハさらつひの事とうやうてあり
必　る副ハ頭の事ありと申ものありとて有ふ小舎人童ハ中つらかみ比し
女御あいのくヘ　　秘　明石中宮紫上一同車也乳母一車し
つさ乃車ふハあらし此のなかいへとをの事ありあつる女御の事也
のしかくむりまて此の事也
左　秘　女御の事めの所へ乗内書ありて事なし
此乳母の付のいちりしさらへありあ兼葉内書たちのかへ也
私の石上母の房ニし事りまつる車にて此乳母と事りなりと
私之此車ふハ明石上して此乳母しあひのりありあひて乳母を
も事をうるかて之ありふくめしさうも乳切らてへあり
あいての人あらへ　　頭　後車をうちのやへ頭ハあまて頭らて副車ヒトツてに
し人の御らてれ云々　　紫上の女房ありし
女御むのいふく　　あいの女御し
あしの御あしも頭ハらつ　　秘　あれハ頭し
左　同之車のうしあしやしハ頭しとも中一執あれハ室の人とゆ
人くあうしたあるすと　一執筆かへ文字とよりてとも一へし

さればこそとはさだかにしらぬは花の波のたしかなるなり
古今に雲井なる人にしらせやとおもふらん
此歌花の下にてよめる心也
人めしくらめ 秘 源ハ一夜の人の月をみてよみしせんと
思ふの心浅く海をさそへんあめし
人これ花にさそふにちりしらんと 此心ハ日本のつさ海なりけんハ
いかにも此君との心をはじめてよめり
松もいやしなからん世 抄 其家の御活にしつくしからん世とし
はかりのいのち 秘 ゆりしらりまみ
思ひあり花の心のうちを心にかくハ此歌の前をうけたるを
さかへゆくそてりとかりくかくらん 抄 おしのとおもふはなて
かりのかなし此歌に一首のかみとし
カミナツキ
十月なるの十月なれハ 抄 一月雨のふりつる事ハ十月
その中の十月し此雨のふりて下の女日の月といへり
テリ
神のいりひとくふくよてあかりけり松の紫のの葉とおもて音ふの
こ秋ときうれくかたなり 抄 松樹の葉し

抄 よりや神の社のいかにふくらん嵐に秋さへハかつ色そらしらの
一流に松の下葉の紅葉ぞ此もて下の紅葉ふしきなくへて、ハ下葉てかふ（古る）
めぐ此をみときえの山ハ此風でちるや秋はやまさかるらん
またのし秋と 抄 古今のいとともかゝ抹緒し
秘 いかならさ海をりし詠しのうちをみてしこそての山―
秋常盤山ハ紅葉ふさそてしくめ風の音ふのし秋の此宗風の篇
よつくひ松のあそら月のぬ紅の雨の風韻にあくいふし詔雨酒
あり月あそらいの 抄 東極神宗し
よくうちあそせかりいやししてつらめいかなれ偏にうし思へ
抄 神宗ハ赤袍なとふかみ抑の事とそのへさ海なし
秘 西とハ和君てし古敷なる海とぬとひ海と心のつとといへり
抄 よしは和君としてて海をあるらは東極てし古敷なるをし花
雨のくハ 秘 経古し
山あいくよきまでに作のやうしハ 抄 山藍 小忌てし
抄 賀茂臨時祭舞人作文青摺袍蒲萄染下襲地摺袴合蹄接腰
摺
桐
桐文青摺袍柳色下襲白表袴合大口赤綾半臂諸引帯木谷

間付之

秘 舞人の袖かへすに立かへりつゝ道すからおもしろかりし

花 羽のつはさ東松の緑葉来ますや

かさしの花の色は　公 陪時宗に拝以使庭舞人桜陰泛山吹

但信者前には使なり舞人陪従のかさしは花の上と名まてなき

諸社行幸の時東松かは使てあるし

めくる花にいはゝ　秘 まつといふめくしいろふの付待しの花

ありしをすまぬるなりしなを伊勢の紀

花 同云いろふかの書写の語ありや　一説いろふハあめくんし

りしめ立たりけるまゝ　江相逢本子 ふくやあるく〳〵の青つかひ

ちらしの花も八重の花もあハりけし

うたや人しれかりん〳〵かさね〳〵　花 衣しぬさい東松し

公 東松語云先一二歌次駿川舞次求子加之旅呂之調子高麗

狛調也　長保五年八幡臨時祭御社左舞以下上達部其外庭

上人合十人舞之　神主立舞相対脱衣之　今案是ハ序舞

と云事し八幡行幸ヶ様の物語の時求子ならぬ後ニ以下

十人のかさぬきめ舞をりとかふのかさしいと云則見しとり

かさしハ三てのゝ下冠の花ともいひてめハ庭上人の下かさしとりふし江

風にあ被付物にはね高く立てりなりていふとも案し

秘 花の色にこえたり

色々のかさしのもいひてめの

松花色こなりハ三てのゝ下冠とも云ひてめハ庭上人の下冠るとし　此の文字有て東京し常下冠のなるし

後ハかの文字の家と同つし

後りにて小ハれくにて肩ぬきしあるを称し

ひさかたに深く

花 同云かたにあるてしあるその梢なり　一説かこいぬるまゝ帯いつり

秘 かさしとあるをぬさいあるなりるへし

秘 まさかへしの家あし

松なるや八重までかゝり　公 おもしろきさ添し

いとあるまゝしあるを萩とも云ふやうにかさしとも

ハ人もの袖とはいつらへ色あり八幡のみ有東松の昔ぞ舞姫のふちるいをみかへ　公 萩をとゝほり

江 萩拝以支為常のハ桝とりつゝめ是代清見をかしの八幡の風にて帆

柄あけてたちあつく付指へあるを萩とおもし

秘
花 河海の説不審し只舞人の佇の身ぶりをせられし
河海に人長にてかゝる事なし同之人長は神楽に舞人長なりて神楽の例に倍従してかなてられ
めでたき事なるよし
上達部なとあかし　同云河海に清見寺の御神楽に桃柏をすゝかうりて
かくるし付萩の枝とおなしく萩とりかはるをさしてかけをかけし
東松のあたりの舞人萩とりさしてかきまつりや　一説は東遊一曲の
同云東松のまねの作法のけしきとこなりあれ
いりはひなるめ
正乃車に　花 一番の車の次第へし揺袋なとともに内に風へ雅楽へ
秘 明石の上のうへなり　秘 揺袋かとおいそかへ候あれ
　　　　　中あかしは一の事なり
源 あはれとしく倍ありしより見たてまつりし神楽と思つゝかはしとも
前の斎宮と御せうとへたなるはしいにしへをかへし給揺袋も
かのうちのめ　あはれしると源帰京のち
中務の宮のかくれをし　あかしの浦に也
さとおもひしこと人　秘 へたのすし　花
聞えて　御とはいはれけるに猶ありてかはさうとは八年やすらかにしはしるかなたへるたまへん
花 明石の尼はむかし　海ちかきこのかみと見　那尼のへし
秘 浩白ゆうしは助罪あるとおもふらんといふ所にいひなしいけらんは
有るかうさし
むかしをてらんとも依頼ありしの神の許るしとゆきてかけてて
秘 尼君白くりはしやみ明石のありといふ女君を心得て
花 尼の目より以下けるし同云右兵衛督大宰代の詞をみへと知り
て後君のとうみはあへ二の車をつりしあらは近年も兵衛督にて明石
の尼の命はかや　一説浅乃命にて明石上のうへし
松におもひておはる　松のしたりも君のなからのあかるを又の
まうふとしのしは付まの下の京乱といふ所にてへし
みしらぬよのねんなと　京上内外のかへしなとは同多く風らなし
白 君耳唯聞堂上言　君眼不見門外事　白氏文集
京上 浅のけさいはてかたをしうくしも八神のうへとあるかゆゑのあかしをかりて
秘 京上のうへしきしめてたのもかんし
あらむ此のおもてのこゝろにいはしておもひて君のあはれあとうたしる
まへはかりのへりけのかほそやいはさくなのこそしくなん

河
浪乱寒田行変海　花開月令取依春　對雪琴　野相公
今案古人叔孫此詩不叶凡　或人云野相公ノ詠ニ未勘也目りつきハ詠ハのへに
さへゆめみつゝまかりしと云前首しと
弄
更附合弄不入にいりて
清輔朝臣袋草子云文時ゝ弄ニひりのれハ詠のゝけり
此句乃ゝ根ゝゆかりつきけり　今案此文時の弄の句根
とゆかりつきりとハ前ゞと詠ある弄をとしれ兄ゝ御前ゝさうゆて
あてひゝの山のゆかりつきんてゝお目つりゝの　又文時ゝと弟子とて
書あるハ名ありこして兄弟りゝ兄ハ関ゆゆかりも乃御風の
弄の八十生忠見集ニ御弟ゝ待をつ中納言風弄成りて此物ハ
又おもりそゆとと又後古今ニ源氏ニゆうゝつきてはあて待
年月たおし八ゆかりあゝりあかりの弄りて御ゆかれの事を
御もゝハ文時ゝ弟子と戒めりゝとうらうへあるるハいつり寿
しこうへのとゆて漢朝本朝の事ゆあしゝ首りるゝし又清輔袋
草子ハ源氏物語ゝと後ニゆてうたる物なりれハ覚りゝ弄なりと文
時とおやゝゝてりや也待りつてんいりゆて源氏乃説とまた

て関ゆゆゆ須磨乃かう風の御ことり　原もさし　未勘之
必　けふ風の花盛ニ春とゝあり春のかうへの葉のかゝけるとて
須磨よりしけしゝやとゝひもやうし
かたはらいたき
袮人へのみふうるゝこゝら御棒葉てゝゆかりもとゝてつら源氏須磨の葉
ふとゝなるなむし須磨須磨ゝ　桜のゆかりまとゝつらふ須磨
秘
風ゝれゝハ本縁りまとてつるゝし御ゝかゝ須磨の葉とゝりゝて
紫上乃女房是ハ源の友女てゝ此の事ゝりなゝし
中務の云
中務二云
くふりこうゆかゝらうへひとまるれハまうふいとちゝ紀紳乃ちるしう
河ニ
必　い
是ハおの前とうけぬよゝあり　　族子ハウリコ
私袮の浪を網文乃ちうしかゝ読りハらあれ
つかしりてちつ須　　秘
草子化
いてきしゝぬ　　出くらへのてぬし　出くらへて對しぬいり
りて帰てとらしゝこゝろとゝぬ
河
袮ゝ語ふとゝて本前ハ前めの袮とまかさうれやありへの
私袮ゝ乃前本末らまつふかこころへりし須網不祓
ひまれふむるかくてとるとぬ
河
袮ふありてゝとハ定き欺之し

我ハ祢宜と人合せなくハ君をかなへ給へし
花 祢宜おもハくハ祢宜なる人のやうに
　我祢宜〻ハ能登の宜なるへし
庭火てりまさるあかつきに千歳〻〻とし
河 神楽有千歳早歌(ハヤウタ)　ちとせんさい〻〻や千とせの千とせや
西方万歳 まんさい〻〻やよろつよのまんさいや
庭燎(ニハヒ)　四老字花云燎乃照及　途波比見和名　毛詩ニ有庭燎篇
よもすから一夜く　我河海よりアリ不用之
うへのきぬの色〻きちめ
河 四位黒　五位緋　六位緑袍　七位ハ浅黄
あかきハひのあらはれて　秘 纈衣ニ染し
河 松原の色ハそれに小さくらのかく絶なるへし
花 織物を染なるし　一本ハ織物也
まさらぬハ下車のたくひとも
見るからにちらせつら　河 浅言(アサウコト)しそれハ云し女房なとの云也
みちらしまゝんとの紅　河 神宝し

よろつのせうそこ　道遥し　あそひつゝかたらうさまにて
いひはしらるをかしうてうちなかめ給へれハ
秘 ちるしゆし　おもしろくおほえ給ふめし
かくの入るの　是ハ后ハおりゐのみかとの御中たちまちて給へれ
秘 かやうの河の御使はしも御とゝのへ　ほのめかしのさしいちらんと河
御とかやのみえ給ひなれ
よしたとならひしたのしらへもうしてうるまをしや
秘 此入るのやうふ世とそらしてはしつかはるまでそ也
さまハいけくるしてし御足よるるのハ世のなかにハあはれなるへし
秘 河有さ御とやうにこそは御足をなるしさそれくてもやうな
御しはそうるハあはれなるしかりしおはしまさこそ入るにのあはれ
さめしつまなかに八一條をはしうやれまし評判也云々
世中のへ子まことありしかなめ　秘 かまよ化
なやうのもののともあそひのかへ世の人のへ人あまくなりかん付代〻こし
河 長恨哥　男不封侯女作妃君看女却為門楣　又天下心羨慕如此
まよ世にはねをとあさうきめりてとえるし
めてあさうし

らしのすくのとにすみ　但云めくさてりけ事　秘 花日
入道ことハ　弄 生前院のりるし　今上の御ゆかりにいとひきうるへし
さらの心にとも
表紋の行幸
河 表紋の行幸よ勅し　秘 朝勤行幸し
孟子曰天子適諸侯曰巡狩々々
者巡所守也諸侯朝於天子曰述職々々者述所職也無非事者
春省耕而補不足秋省斂而助不給
邪文乃心るり　女三宮し
ち川池ふれ　老 大宰帥のみ
秘 源氏と大くゝろゝのふそとこしらへて給へり内のみかと
二品にある御ふうしぬきり　必 女三宮二品にぬゆうのこと 花
河 二品親王封百五十戸位田六十町　私此支非し
必 祿令一品親王封八百戸位田八十町二品六百戸位田六十
町三品四百戸五十町内親王封減半位田減三分　今案二
品内親王封三百戸位田二十町也河海に考ふるさましゆるし
老 同云御封戸なとしいるハいりやうのみそや　一説ハ民戸し

十戸方戸人とも云ハ民戸をとらせらるゝことき又と封戸人とくてうし
封戸とりく年月ふる人ゝゝ御さらりの心ありえり
宗上の人しらしくゝうりのゝゝかうは女三ハ今上の御妹にて二宗
なとしの明石上ニて女御の主母にて行ゆゝ御もしきん
もていまふいさかひりゝ海し
うき身とてゆらいとゝゝゝるゝ　秘 宗ハ源の志とおもなりうらし
あらりうしつらりなは　必 源ハ年と源て裏ねへさきん
さうし給やりゆく　秘 宗とのふうつひ始し
内のみかとさへ　秘 女三宮の心るり内のとゝさへ御里し給ゆるり
なれいとろゝのれまのつるし
ひとり給へ御とやすくひとしきやうふ
老 女三宮と宗とてふ源氏のくゝうしとらて
さゆへささうは　秘 宗とのゝて
東宮の心さしつさうれ女一宮　秘 あし女中宮の心後し後ふ
萱ゝ大ねくりもとのゝへし
思ゝてゝゝゝん　明石中宮の宮達と給て宗の心とまさゝるとし

夜ハ作りて
大将すゑ風なりしかたけりてのミちと　秘 花ちる里し 花　河 曲ハ猿 惟光為長の女こ
花 夕霧大将の作る歌りしつれなのかしなり
かくてしかとしらハ　内侍のすけ紋の作を也源かへしたりし也
ことに紋作を清ゑし　秘 此台中宮の作紋の女官紀の子数女院后也ハ
花 源の雅不昌あつとし
つまりにしなくさめまてしいけり　源の作さ女なりへし
右ハ大との宰相一つけ返つり　秘 薬宮して
青作りをしくしこゆるら　河 むりつ御源氏のこひくあれかて
花 玉りつの君源氏の作るふて返りはへかとおもしりきいしかり
しくは源氏の作ゑて
作ゑの人花　秘 女三宮し
女御のこミハ　花 相違し
秘 中宮ハをさるあひまへてしゝむとらくとはらいゆ今ハ此女三宮の是也
のし源ハくかとつきあまてしなり
御風をとにいてくるるしとさかしらん　花 女三宮し

花 女一宮の作るし　秘 女三宮ハて見ゆから花鳥の説いう朱雀院も
今ハむしさすふくらく落ふとくらちしれて　秘
作るもちて紋して有さまいしれくありゆへつり
女いめんなんいまてふひ　秘 女三宮の御むかなら
らうしはうりもきとさまし　朱雀院のいかてあるちわらきかくらいれ
こし女御の童てしして たまハ東の紋にくして　女のまへつこととし
作らりの人御て　朱雀院の作りくらへ女三宮ハりからなみとし
つりみたくいゆ　つ作なしてれいつつく源の女ミの見めくもとこし
これもひさり泊くんらう　秘 今ハ朱雀院ハとしり十九し
御年は十からう源ハ自し源ハ四十左もし 花
秘 御殿てし　宰ての君し
わりみなとしてうしかや　秘 御殿ハ作るなうさぬかくらうかあらう
作るに風すいさね作ものかと
河 御イモリ日本記　白氏文集云十三年來生對山　唯将無更化
人間　齋時往之寺鐘笑　一食如何不食肉
韓康伯曰徳曰齋防患曰戒　延喜式曰齋稱斤膳 承之斎
菅家御集云　紙囊生薑稱菜種　竹葉昆布記齋儲

人々心もとなし
古わたりの御みとりふかく 河 心知 心好 秘 女楽せしとさまかはるへし
おほかたの御ひゝきにくらへてはおほえぬ人
又御おほえ三人のうち四ハ侍らす一人ならん
なつかしきものゝ 秘 女三のよりの御ためハ手つし 花
ゑかてならぬのうちハ 源 宮はやんごとなし 又源氏
おハしまししるところさんの所てと
さるところのさしりらハ 源の氏とくらハふしうちひとつ
まさりきの御手てゆるしくまりしめんとし
花の御前のきぬ 秘 女三宮 花
ここらくしたん まさりの前とし
たゝしきれにてふつきぬりりふへさとらく 今上の御子
河 琴之大曲也春ハ角夏ハ徴秋ハ商冬ハ羽土用ハ宮也律ハ寒
呂ハ温也分清濁諸五音法曲也蔡邕女琰曰舅姑若命之
鼓琴必生悲操琴而奏若同曲名則捨琴興對曰其曲小曲五
絡則止琴有大曲小曲也 出大平御覧
尚書云邕俗詠律和也 邕謂五音宮商角徴羽也謂六呂十二月之音氣也 主堂俗邕律以和楽也
そのれいもこちめたき 秘 小師曠ほといかゝ
河 楽書云師文之変易寒暑孫登之感動風雷也 琴書云師曠ハ
晋平官也上於琴能易寒暑召風雷為晋平公鼓之感玄鶴二
人下筆
ふりこたへにとくはう 女二の宮をとえとらるへし
ゆかんるかりにし 河 田舎 押シテ 手仕し
秘 田ハゆかし ありもかハもとし
女御の君 秘 明石女御
みとふつゝかなるるとゝもこへしさんへし 花 明石女御の歌侍し
まさりしハむねつてなく懐妊有るし
御月のかさなりて御けしはりしけさやか
河 宮女懐妊者故斎之前退出宿所不得
上殿其月九日潔斎私前退出文外物忌令
十一月とりの人ハかりのへさ 河 十二月十日神今食並礼

秘 十一月なくて 一本十一月とかけり十一月神今食潔斎之日なれバ也
又十二月ハ神事の月也 毎年六月十二月ニ在之
花 十二月にや仏法ハ十二月にハ神今食一段の神事なるによりてにや可
忌穢なれ 或十二月と有又十一月と書本あり
なりてまかでさせ給ひつ 秘 明石女御の事也
そのまたの月ハ人にまぎれてまゐりて給
河 枕草子にさむきにさし御しこ梅はえたる月に源氏のあなたなる
秘 人のめでたきさまの見いでてし山の梅語てハよろしく候ふなり
はかなきことハ見えぬ月と源の世にしまかせし
女ハなほいまにいとやう 秘 いとかうしとて末の世にみだれぬ
こころにふかくぞ思ひこえし也
うしろめたし 末摘花六十歳 源氏四十七歳也
院の御賀 秘 末摘花の御賀だにあらせおぼしめさるへきに
花 院にもさせたまひてからそれを源のとハ給ふらしのなるらん
二月十余日 二月十余日に源の御賀の日なり
母にはつるなじみゆかしう給 其の女三の琴をも慰りのある

さうぞくの裾 筆跡遅し
女三の宮に読ません 秘 女三の宮ハ試楽し 末摘花てもまなべきて
一とのみめだちなる余りもさらにはげて女にもおもてし 花
河 九條書公十一年鄭人賂晋侯以女楽晋侯以楽之半賜魏絳
史記云孔子為政斉人懼棄鉏之選斉国中女子好者八十人
御記云天記三年十月十九日召内教坊妓女十人令奏糸竹
まいりけるのとよのあかりてしれ 秘 むかしけるのとよのあかりいへるらん
とりて源の手をつかはしめして
いとめづらしうしき 秘 源の世の内に心のあらあらんいかしとし
秘 源の自撰の調し給ふ人のもと心をのみならずめしより也
みこの御のみて見きよしめす 秘 女宮をのみいまのなるハ源氏
有名なりしのあつかひてなりし
きんにまさりしめ 秘 此てハ女三の宮に源へ身をいてなきさとし
さうぞくてとしめ
廿一二ばかり 秘 女三の宮 十八ばかりへし 源へまとり源よりうし
十八年にもとしくありての後八年くなりのぞ 花

ならひとりつかうまつり給ひぬ　朱雀ハ女三ノ父なれハかくもてなし給ふと云也
まふりかの御ためにし給ふ　源ハ朱雀ノ御かたへもよろこひ給ふ也
正月廿日はかりになれハ　花 源八十九日也　細 二月ハ女三の月として給ふなれハかくいふか　花
月ころハいとこまやかに　二月ハ余寒なをしはけしきゆへにかくいふ
ちらしめさるゝ　細 ことしハくるしくもおはしまさぬ
きんてんのみすのくるまてさつりかゝる　花 女三の院なるへし
細 女三の宮はしのひてへいふき三とつゝしみて　花
こなたにみえ給ふなとハ　細 女三ハしとねうへにて三とハひのさいはいなるへし
ともりへるかをりもかゝりに似ゆるに人　ヨタリ
むらさきハ女御との御まえにし明石ハ女三の御おとゝにとなりなるや
あつまてこ　細 あつまハいふかし　細 紫上ハ箏也
女御の御かた　細 ゆかしめし女御也
細 あとえとかりつゝなりいと
江 わうしてハ王ふ給ふ紫こ青きゝ　花 磁瓷ハ青瓷石也
こなたへのよるなりし宮のきし　延喜三年正月十四日踏哥也
西沈三六以給御前人取人物給祿子と

紅梅ハスソウト云物ノ名也
なるとかたかたのきぬ　細 正月なれハなり
花 一説唐綾と云ハつゝきぬなりとものさる也
まへのはしるゝのさくらのかくしかりつかは
細 あをに梅のなかゝしの青瓷なとの色なりけれ　花 紅梅ありとも海の色
江 紅梅さくらかさねてまなかつあらはるにしいはるゝ御ゆかしさ
さらめなかは　江 紫上はうちとけつゝ御手帳のしらへ
とのとゝめ有けりこさいハ略儀也
女三の御かた　細 女三のこと
江 あみきのいろにてゆくへかの青丹ハ濃きさへとさくらのかたな　花
あかきこ
細 源の君ことなし　青丹万葉にあをによしなとといへりくし　綾綵
の色めかしたかりはふく尤色をとつくりてあけゝれは　いひ
そめかるし一説源三かかの物色のきすかうへを
みつ柳のきかねこさくめりとこと
流ところまゝ人へこの　細 源氏なるへし
右の大いとのゝ三らうの君のあにさゝの君

難星心の男子に人して先振のる子二人して大夜の為くハこらう
まりつく振て端子をていふれし女子あくもてみらるのへとらむへて
右大將の御女らもりとこ笛
ゆゑこそりの端男子と升の丁さうし　左大將殿へし
御子ま母　定 住の拠后し
ちんちのあかく給　以 紺地紫
宗とハてらくしこ女　定 北てのー也
必 女三宮ハ安尺后梅れていてしこうえひと給りしして男宮有し
大將とさして　以 久言し
あらしのもつとえるあらうあへ　御后のかハ皆源の御子し
わらんしてりきくなぬたうてハたまて
和琴とハ目本まて此のりのし六緒のて源たりくてもくみ二人の梅
こ合ちうるんゑりさむしいつくこきたるのまえとくる和っ絹く
息のこの絹ひてとかり紀合ちる　秘 古来ちらゑ考ふまし
定 同之息のむしの音ハ皆りのあくしもつりのしいて武本小くさう
根とにつのハしるあるてかてハ一弦義ノ字書あゐやさう有之

さうりのハまことさまし候し
義 未定りまうまか　定 内裏よりてかうとりとしいへり
おろへのあとくしもて　定 梅もたりしへし
義へそまてかゆりまる
秘 梅めへしあるりこさは二品のたしへあるまてハのへかなりや
廿毒し婦る宮ハ右命し　表子の宮しと
秘 古宮の義不審已源宮たりへし　古二品ふ可有し
りうひとさるへつまみしつ御へ
以 むのまいと風のあまり小あへハあるて高さそくさうへてハ唇
おもくのあまりの　定 夜中そとらて
さり此ことのちるともうしさしいとゑ　源の笙そと
下よ御ちこうしさうし也てあいふうへかりえ 定
ろくしこゑ色ゑたれて　必 源の詞し
うちうしちうちとゆ　必 久合常し
いちこ流てりの十男ふくちのそとくあそて
以 義種笙調子種し　双調以三為義盤渉調以九為義也

不殺之法ハ物法とらへてこゝ調子の字の声をとりかなるハ一越調
ハ一の法とこたれるといふへしあつかや法の歌し
花 字の法りやゝ法見河海未決

行くさわかせつらい　秘 夕霧のひさまなとし 花
さるふうへの所わなひ　秘 夕霧ノ詞
さし宵事なをして　秘 源の詞し
うりふしさうの升なとくゝ　河 直衣し
くさひゆるもとうくい　孟 女房たちのからあるゝ柳し
るうれ河らへの歌て　秘 御禁あ古まうて
花 若御つくらうへとの池
河 所らへとハ上臈のくて 或云 松蔭と禁古の若とこそ 紹巴ハさして
おとさゆゑ此物語ゝ人の名を蔭といへるわうして宵
物のひかりて 花 紫宮よりてれひまくもりやおゆるし
くらしうつめ 細 夕霧し
たちしかりける 細 つうれてをゆいへり 花

月くまりなさきは 花 めしまさ白沈の裏し
秘 ちら沈の裏けさ御し月のうてとゝ御といへり
紅月のうへてとゆきふかき宵へうちて此来の詞とみる 給の月
くつしさしいてしとさらてハいるゝ出さるのて
字の御けしき 花 女こし
細 夕霧のかへりとのてこゝろって
二月中の十日はかりの青柳のまうつくしさかりたるしゆゑあん
化して鶯の羽かぜにてもこゝぬへく
河 白雪花繁空撲地　緑絲枝弱不勝鶯　白氏文集 柳
ゆきハまねえそこゝしなふあてふるゝめしつゝ二月
はりの柳さうり柳のさ御しあり
呉竹抄云
鶯の羽風しなひて青柳のうちとて梅とおなしゝしろうかな
孟 緑糸枝弱 ― 此語より　花 川おもてしたり
甚かりさうしうり
あく法のたしか　花 濃妓の竹し
かりけの御むとゝ　花 大都しくてらか御し

言ふることハもといふなり　脈息ハ常の事なれハ大方にもあるへし
もといふことハしらしくへきなり　秋の夜の灯
旧　桜ならてハさらにこそなけれ花なれハわかしく草木ハ梅なとかなくふ
秘　詩にハ柳とあるなし　楊柳と杜舟とあり　唐の詩の文字と云
ふハ杜舟のるし歌ハ梅の字といへハ桜のるしとハなかるへし
もあさいのもへしさて梅となりとられあるといへり　也
はれりの花のくるかさりなる
む　秘　柳のさねみとりてりのゝ花ふしられ給へとこそかや
明石との花よりまとめあれハ今これといゝれなくや
まかみしみて　本色柳をわかれし事ありて早下し
まちのりくなりし梅といふへりて
秘　藤まりことひかりとのひかくとみつくいつかわるし詞し
さ月雨の川ふかくなりてるの
旧　梅たちさんふさへとの梅さん梅に見れけりし月の本
旧　秘　さ月雨ふかふかの鳥とりけハ昔の人の袖のかそたる月
秘　梅たちさ月に必たさく花なれハいつもしさ月待山鵑のあか

ともなへ風前に月し　秘旧のの月前月出て及くさ独し
あいの人の心もしらりも　秘　野原の風あしなかの月し花
人のいとめをさそて　旧　寝し　此頃夕暮の人の申し
涜をあれら　秘　半夜花絶し花
ふやはらさいよみて独れきくらん　世こゝの秋宵さ独此夕暮のぶ
人ハあすとい給ハる本なるあさしゝとつさ細しつし
なの御さ　秘　母あさし花
あるかちてあるかしく　也　夕暮風吹くりて身とゝらくとさあ絶し
なりまちの月くつりさきさして　旧　春宵一刻直千金
花有清香月有陰　歌管楼臺声細々　鞦韆院落夜沈々　東坡
まつのとほら月夜と　花　源氏ノ詞し
秘　おかなる月夜よし　涜物くもれへし　まつのよふる月夜ハあれて
も秋の本とハ但をしの川の梅とし
やうわりのゝ音ふ虫のく夕暮よりけんせしめ
　松虫の聲と梅の音とよみ合し　花也
秋の夜のくなたの紀月　　　夕暮の月

ゐの露もいろく　秘 秋のひの猶し
春のころのをもしくしき　岳 秋のころとしのはしめとハ大かた之義也
とかめかる詞なるへし
秘 笛の音もとふむしとは春ハ子に〈さとし〉女房ハ菊附とかめぬかいへり　行 女感陽氣春思男感陰氣秋思毛詩
女は春のわくましむと
いふちのさらしめく　秘 源氏の詞也
いかにつけても人のよこさりてある
岳 御是にすゆしへあかて　必 むかしよりかうしたしけるを名はん
まちてハいかくいかハさらいめん　私 此川うかゆ
春秋にふひらくもしてゑんりのけ附すつきついらるにてるハ
此并論すへきなし
ちりのよもハうてもあかちら附ハつきのよのすゞ夜同
行 曲呂ハ春のちりし律ハ秋のちへて　本ハ律呂とこ律ハ陽
呂し呂ハ陰眺し從てる　從る子ハ呂律としゐて律と正こ五音
必 らくの調曲也　月本ハ呂律之陰陽と男子るし夜こハ律呂と云故也取る
岳 ままらこ附ハつきか物のてハ春をもさらなと源氏のかの云し　同月の

きらへらのよのさかりてしまゐら附ハつさのよめいくたる洞田に
從る子ハのちらいかてこと呂律と律と次々とたうけるかえ一勒
從る子附ハ呂律とやつけ附り　同本物の註論にあ附て呂
律とい陰陽と男女るとも　從る子てはもかなるゆや
唐こハ律呂と云ハ陽とさら分てゐるし　一勒
一勒之一帖至若菜下此注　文明唐子同答以上
　必 菊附のいうそくの人と源の女のまかて
　　岳 人まうかさるとちのくもといつるところて此
いかにもいゆり
そ風のくしく
稀ひかくるに示らしとかくき
必 人の風さりわる附いつり　作兄といかうつし
かのうかるあめもら　今夜の女示し
そうしゆうしむりき　岳 女のいかゆらしとよかひらくしこさうとし
私 人なとかゆのしらひきか女ハ山耳のあもしうし物かるかなし
あやしく人のさしおかくさりまさるる寺く物のえて有て須い

御ふなるとての御前の心あさい　抄 此女かたらふ帝物くりざうと

猶つゝしむ此館を帝 物ふりやうつるゆへにやくめとして源の自称也

花 源氏の家のもしの御袍の二え有ずして[?]やまぬ也

松坂物がりしに六条院とりの二えんみずと源の頭中将[?]皆

但いふへくあるよえんくさかくいうなるを得るとも袍のこえ有て

月さす所なるとての御前のと有是ハ内裏の事なりし袍の二之院

所のましなるなどてありけりし藤壺の志ふかさしてこの心のかはりて

一二ふさりしり又なへ所てそまさ御ま了ふりしと疎の女ニ本ハ端貞の

志して源の夕霧と明のよ　詞也　秘 夕霧とやめざへといひしと斜故

そまこなんこるさやきんして

して有つるもの也

おほん三常にやのやりて　夕霧成ふ御手の心くるまて御志めは

あてやさんからむ言と恋のしうとし

明りての代　河上代也　秘 常盤御代よりてここの御こと

花 上代ノホリテノヨ　夕霧先早下しての詞也

またかくりしなこさ代　比巴 和琴ここの世くハたりの人なりとし

まさしたるぬ心あらひて　としくしくねうんあらひ[?]

あらくてありびめるにいうるなりとし

さうがあると　唱帝也

和琴ハ本のよく　抄 越後大臣也　花

あらしへなるひうしあり　花 玄と具あてわふげして調合をそうし

こハきなはしぬ　ま一うひさまかるのうちれりのやうとし後

まてられたりるを

いとうしあるての心ゆ　秘 帝上御めあって

さくしここさ　花 源氏也

抄 源の詞也

まさりりふ　源のましくお伊ゆき也

きみに言さへハありぬみしいふと　御まてありの源と源てふ[?]

はかししもてふくろしりつへめ　秘 明石上の比巴は和琴ハ入せさるとし

あく風ハ源氏の君子なり孫と弟まてハ女房さ[illegible]

かはるぬ事ゆてぬ　花 大弁の宿りて也とし

秘 明石まてゆめさいさての後大弁のやとまてのしるとし

礼明なくてはなくしめつかとし奈り哉いく
またしに　明石上の此巴の京まて父あらるゝ御源の
秋かしもちのやうふのきとしたらとし
よろうしも哀まて八月ちしもかとし見さへ月様有へし二子達
まうりのうとしつくくり
秘 猶居ととしへまうで　奈 西中とこしへかうで
ワららふ行くへ成　行るほど様ふうて思ひ尽と拾めらうて
此見えたるらりハあはしと也
なうひうんことハ　二字さとふ哉てあくいうんかりしうら絶し
そとしり物ことへの　必よく鶏とらへと師範にれなあるし
奈 嵯世源くそのへなうしとしさ礼ハあまてゝ川うなるちとこへ細し
なうらふ　以 巧声カ 論語ニ出タリ
らよやかへく　必 大尾ふくてしく有いうこし
円川とのへ大きに行ふうるかととちくちうとかなかふよえてぬ八
此えてらへ成給とし
琵とかかんかん御まつりり

以 白虎通之琴者禁止於邪氣

以正人心也　文選云臆三養而神物下降阿琴德之深也
馬融琴賦 礼勤文選琴賦嵇康無此文馬融作笛賦件賦無此文
若他賦之文乞執可勘之　素然礼云此勘註不知誰人取之
秘 琴ハ根源より此をあらうへてとなら
あのよは　礼哉るかなるへし
奈 天地とたひり　以 楽書云琴動天地感鬼神
礼云行海ふてへんちりんあし　ふ為ふてへんちて似居ふ成
奈 ちつらゆかんらり　以 楽通鬼神
よろ川のて様のうちとさていいぬ
奈 猿笠琵て風情ふさてこふみやてまさていぬ洞のへくすやと
秘 猶の本笠琴のうふさてりいあらし
りかしら嫁うさ成　秘 琵くの国し
琵ての徳しうふ抱てうなうふしわり　秘 尺てあり
ら乃ゆまひさつとふ給へくしめ
但元恭天皇之武天皇モ弾琴給
以 波羅門僧正始渡本朝よ
奈 りつかれふへしとりふて有
必 よろふれ抱給まてりけ奈

としかけもとめぬなり　　きんのことしるへき遣唐使之
時波斯国まてわたりし
雲いりてもとらしゐるためしあらはる西不八有り
河 楽記云楽着天地之和又曰移風易俗天下皆寧 言楽用則正人理和陰陽
漢書禮楽志曰象天地而制礼楽所以通神明立人倫也 師古曰倫理
又云孔子曰安上治民莫善於礼移風易俗莫善於楽 師古曰此孝経載孔子之言也
文選琴賦曰至人攄思制為雅琴
大周正楽曰賀謡呉人也常夜弾感鬼神見舞敖曲
文選嘯賦 成公子安名綏 曰發徴則隆冬熈蒸騁羽則嚴霜夏凋動商
則秋霖春降奏角則谷風鳴條 注 翰云熈盛也徴夏音也故冬
發此音則炎熱至羽冬音也夏騁此音感嚴霜至商秋音也春
動此音則秋霖降角春音也秋奏此音感温風鳴條也谷風則
春風也皆音律至妙感應有如此者 善曰列子曰鄭師文学琴
於師襄〻曰子之琴何如師文曰請嘗試之於是當春而叩商
絃以召南呂涼風忽至草木成実及秋而叩角絃以激夾鍾温
風徐廻草木發栄當夏而叩羽絃以召黄鍾霜雪交下川池暴
冱及冬而叩徴絃以激蕤賓陽光熾烈堅氷立散師襄曰雖師
曠之清角鄒衍之吹律無以加之 張湛曰商金音属秋南呂八
月律角木音属春夾鍾二月律羽水音属冬黄鍾土用律徴火
音属夏蕤賓五月律　鄭玄禮記之註云喜蒸也壱類曰喜熈
字
きんの物語とかいひけるはいとつかうまつらぬをわかくからなるけ
てかのこくからるい月よりつかうまつる六月の中の十日の
ころ言ゆかむとうしみうとをこなひさせたまふへきにて
おもしろきころはいめつらしきことのしらへとしたて
りつもしりらしひきならすらむけて言降しかれいかなる
しからはひとつゝめるかいのやくめてしこゝのさうんなる
あこきのつくふゝゝさうそめ
河 琴書云堯大徳堯弾感天神降怒儼然言和之至也故堯制神
人暢　禮記云史禮楽通乎鬼神藤芸香散楚江頭湘竹叢色

波不及寞地悲絲写離愁夜深簫外見神愁　聽琴　水傾

らんさうへいかうりうふ

花 琴てふるものはかくしふるまひなりとぞきこえし

此琴たゝ世の教と琴てもたれかそれはさらにとや

しかさかうふ　むつましきりのなかのふかゝり

きんの物とよ申して侍りき　河 衆器之中琴徳最優　文選

世中にいてたる　河 出離

りうらうか　細 日本にはつたへけるはうとくあまりしかて

なきなるのめゝふゝめ　人のいてつゝりゝるゝるゝりう伝へふるし

とつりしこさむ　其も曲し

らんふしのいりなるふとしいふゝもつゝふりせ

河 日本紀見在書目大　藤原佐世撰　樂書三十三部二百卷

琴經一卷　蔡伯喈撰　衆圖四卷　琴操三卷　晋黄陵相衍撰

琴法一卷　趙助挈撰　琴録一卷　琴德譜五卷

雑琴譜百廿卷　琴用手法一卷　彈琴手法一卷

既咸圖一卷　雜琴手勢法一卷

御とはへむくてなかく　花 上にはなりきのつるし

河 此ゆゑとて宗師のとて有祀師りて宗師秘時の人有けるとも

いたりめでたく月はゆるるし

ありてのへしはめてたくへくもし　河 上古人

らの流といはめはつたへさ　河 源氏せんすゝといゝ宇津保

風をさ斜さひなりて　秘 此合方お猿さきさゆる神代に

大将のみくちよりくるしくて

花 久方のつくへさゆるゝ御とちしむらふし

らのらあふめちの　秘 此石の箏の御源ぬらのるし

なとさゆて　少 みまけすゝふ御し

二文字いまからの紀ありめ　河 今上御子

少 源の物へてらへし

花 此箏のる源ゝ盛へて三文字ハかゝてし

さもの院てゝ琴りいへしゆつり　花 めしの女御のと紫上へてゆつり

まて又紫上の物にとも源氏へ寄りしし

とゝさはそこい　河 深る宗　葛城呂　うつくしきあくし　れうんなりるやと

よろつのものゝなり 二段 えのとおふたつまして かへしかへし
つやちとしことく 三段 ちるくめは めてたりはんや家
またちことをんやみしこしらく
花 りうの呂およせなれ 一の節
世れにてつひは 花 皆ふたつの所によへし
らんのてたりと 河 掻手 塙説し 紙源統絃らし
花 源説し 哥 曲は呂し律のことにあるへし
りうてまうらるちうへりりめ
花 呂より律へたる河し
河 時律調比也アリ呂よりも律まなる附律之
きんはこりのちるへ なりけり
河 琴五ケ調 掻手（カキテ） 片垂（カタタリ） 秘 大ケ京のちるへ 水宇瓶（スイウビヤウ） 蒼海波（サウカイハ） 雁鳴調（ガンメイテウ）
一説胡笳孔 白氏六帖弟十八日笳者胡人巻蘆葉吹之吹
卯未也胡日笳播為琴曲 花 つかう第三巻目にふかやこれといふ
ことらのゑてかくらいつかうしあそひける
花 かケ也見河海 或ハ五六のくら

河 万秋云五六帖なるそうり破らし所名よりめ云々破示とも云也
今案御抄 枢盤渉調呈出之唯可謂奏下哉 万秋示説
不審五ケ調中呈五六破示若手
五六のはち 弄 説々未决云 禅案 秘 不知是云 関目上
め云のはちをいとおもしろくすまして
君秋萩のとものあなうへる 弄 云々のみ時ふちくなひて
事にふれて調へりけるなんかうひきしてこり
いとうつくしく 女三の宮のとこのひのゝさ後し
これ男事の 矢 七八月の人くし
みんとうりぬもしくしき 河 耳の字ここと
し夜をここしとうりとおかしと花の音しかなかなれと
耳とらて琴の音あかしおきれの君とそとりうて宮ふて
さうの笛のあそひうけさうして 御そのさて
矢 むつう乃君し 御そは源の
よこ笛の君よけにてうり
秘 あれさかりは事の事し 弄同 矢 文書の御ふし

宮の御かたより　秘 女三宮也
あやしやなにものしとて　源の御かたへまいりて宮の御消息
宮にハおなし御まへにてこなたへうかゝ御使なと
秘 女三宮より源より参らせ給ふ御消息
いかしきこゝ御あさえ　高麗笛也　奥
御子の御うら給へる笛をとりて
いつまてとくとらる　秘 源の答也夕霧の大将を
故致仕大臣諸藝と其後をとしへ源の方藝をひとしてあり
作りけるものかりりて　紫上の御おりし給ひしこと
よりかかうとハ　秘 をとかたし
辰なりや　奥 枝は女なきの事也
とかたいへきさうり給ひね　花 承對紫上の事也
かくさふありつ　奥 紫上ハ女三宮に御方にて咲き始めり
秘 紫上ハ女三宮の御かたにさふらひのかとし
日をかけぬきて　奥 源氏と紫上とし
宮の御ことの音ハ　秘 源の詞也
よはさなるにかくりく　秘 大坂なうしのるし
夜ふかりえの　秘 此山遠称也　紫上の御ことなし
道称へ風のよもふくしめてしくなるを
とはまかなかなるものかな　ゆくらかなれとみてもらひしへきてとし
うかいとさらしてもなし
源のこのかのなかり　宣ふかとのいめて内へとみて紫上をとしてとし
ゆかしきの御にか　秘 源氏の事也
ありハこのひとく　秘 夕かほ上一葉の上一族也なとし
秘 母女房朱雀母父御一門なとのるもありけりへこれ
みまてりつくらや　秘 猫禄あまたなりハ何るハつてさとし
ありかのしさめて かめいぬものに人にめやらんなをかしらか
たいのちなりゆこゆとのおもて
君の事　秘 紫上也
ひのつかつのゆかしも　秘 此女のおかるし　花
こさこさとハ　宮と姫て姨姫の方の御ことに人ハなりとし
よや風とゆらなかぬ　源の子の御つふして紫をとれさてお宮へハし

そのまゝハ人まねをこそまことにならはゞ　必　さるやうのゆくへもこそ
嫉妬のうらみあなかりの御ことはさめぬまし　源の自悔し
一のこゝろやうの　秘　女三宮也　抄
はうりうのくだもまし八　秘　自身ハ思ひきゆべし
源ハ嘆ふるさしとさうふことして紫上ハ貞月のよるの又たれ
なほさりなきよ侍りかれさまつておのれのことはなきをなのさす
紫上たれハさりとてもなかしきこえし也
ぬるやうに　秘　紫上ノ詞　抄　紫の露とくなるものはさめつること
おりしかたは身のその色にかゝ
紫上二昇下の詞し
ふかくあたけりしさ　女三のまへまねとどらくこめて身の心
さいふつこの　秘　さなしいとし　抄
いのちたらりけるとて　前に源のりのこゝへての上自然に
て今こてもなかしへあるにぬるふて流されてやうにさうなる抱
しさハ紫のあのありて心のつゝ
かうよりけるかな　ら源とひいはしもつるさ侮し

かのやりかる　らましたてハ紫上源へわりもこそのやうにもひ
なししかつくさへていかにてハ行まいのはみて龍世とこえてもよりやとし
ありさうしはつ次のか　今の世とはを定たれけれし私世七
さうしとたりわが　必　さぞなくよくへあいやうにはうへしこし
そまつしも
何となき心ことなるもののかなと　秘　源の詞し　抄
ことさてすへくし　紫上へおいしてのかくさうしと
かくしうへめ　紫のさ心し世をとうて御侍りしる御源の自ら
なれてう御いつりのとうなれし
こちてうれらり　源のいひしたらりとて
とほしハあるれかし　秘　占れはましおもてもちくまいまの実法
なうとりもいのへてまえうるとし
人ねのうへとこと　抄　ありひのよのあ
秘　葵上てしえ服の彼らうしまひかし
流めまし中ようしと　秘　後悔し
又まかやまちつたゑ　必　子細のなしそのまゝ細々下にりきのへ

女にハたとへ

しかりしをまいらせりけるにて

あはれなる　不足なる事のなかりし

さりしとなりけり　抄 覚なるハ女の為ハさしもあらぬへし

秘 覚なるへし　葵上の事なるし

らみゆる女のさしくるさかハいまつりし

秘 なか麿ハ流されし　私 かうふハ女しつゝ御前乃ものにて

中宮のくらゐやらさ所

かのつなきめしこさ　ゆへしくゐよし前しとゆかも

へここくて　秘 いま京は息所

らしへさ御して　さまつていらいみゆくえにゆゑ

私 ところに根のあたりけゆるさ所なるにそいつめるか性　抄 根乃源氏成本性し

そこしけるをゆるなとみてある古めへし

ゆかりひなくてなりしにて　人乃御ゆてたらく恥し

かうしへしたまひゆへしさくてといふへし

うらみ子めし胡ケのむつひ　余てへるとなりけり

て給ふ乃むりあやなりけりしれへとし　抄 中宮ハ源のみかとし

いとわかしこ成后ともちて　是も御息所の后にてあれハ源の罪あるへし

まつる肖　抄 秋好中宮乃冷泉院との后

中宮かくくさるへさにて契り

契りハさこゆかりあるなりてそあるめといふなり悪

背ともあて源のうしろせめくもるし　抄

りの世なりしも　秘 後世をきてりけし　抄

こゝ後つまとめん　抄 後世よりこちらしまのつハさこし

今も前てなかりける御たちのいのちさそふ　秘 無御身の小后にて

こうしかるにハ人乃かたく　葵上は息所皆思人をいさうかくむたし

私 此物語とあめりて又は息所乃物思こそまさものゝ宗

の月りこえあり

うしれたることのたとしもて　抄 内のたゝこハ明石女御なし

秘 明石上とれたるしさうしも紀人とこひしなとひ乃めて源さ

人をそこし源のわめるまて　私 是よりは生乃人くりて

抄 明石上乃か給ひしとなりけり

こゝろをもてしつへぬと　花 紫上の詞 秘
秘 是は息所葵上をたとへしとハいへとも今なれハこそ式部卿宮とハいふへし 花
いとやすらかにへたてなきさまなれは
秘 紫上の心はさかしきものからよしをとこさとし
女御ハことのつゐ　紫上の明石女御をも大切にもてなし給ふ
さいはひめてたきよし　山 源のにたりのかた
花 源の詞　私源氏の心きりへ
ひとかたのてうしくと　紫上の明石のうへとハさうしてはくの
首しつ女御の后かめおほけハ宮にて紫上のことひきうつくしまて今は
おしはかりなからそのあて源雅有へてとかめ給ひし
こゝろハさうらうかたなくなくハあやしめりのかた
山 さてハ紫上にてしひてのまへ詞し
花 心をなくよはりまさるなかなか心たくへのこゝし 秘
秘 源の詞おもしろくへと思ふあへらし
いとまかへてもしありへ　秘 物にしこのよのうへらは雅有ら侍し 花
あくいとよらひこゝらの後へり　山 女宮乃御かたさひさしくさまく

川かわりし御心さかんしよりて女三宮へ源のすこしうつくし
ましくらんよりへたてなり　花 女三宮のかたよりてもいふし
秘 女三宮の方さか御せんなり
いうハいともかしこし　山 源の詞
われの御さかゆゝせてこゝて　源の歌とものゝし
明石のこゝろありぬめ　明石の姫君の三つおゆく御后と
對の上ハのこゝろくしめさぬ　秘 紫をして
この世のこともひかし　花 紫上のをて
前きりとてみてあかるゝ男ハあさくも　花 大さと古記語に
てあかるゝし
流にようこそあかりて　仍 よろこひて首にしたかりありてまへ
きつこゝ波のとまし　あへく
おほぬらし着とてさてしなかれてこゝよかよき世ハみて霧を
まきつ海のはさむ塩ありくまふあらんの消あ物ようもたて　かのは
紫の二つのゝこて御返事をて御かれ
まてかくさるせはあはりにもふりの御し

わかしくらはでて　しらされの男とのるし
きこくのおもひつるやうに　秘 あらくはかなきことをいひてたはふれて
れのおもひしるし
人のおもひひとしく　秘 女の男ハ瞬如ず一乃物ニいひたはれし
ましひとなりやしのみ　車で胸中りのこといひしに付る名乞
御せりそこしやのきせん　源の女ニ乃歩くおかりんれつけはさし
らんなれしく　花ニ乃男ニ宗わたりうへし
女も男もぬるみぬ　行小町集 人あはぬ乱りつかへくあかぬれと
男さへめづらしく御かのほもうるか
花もいふ　源ハ私り侍りてあそくか下りめのみて
女御乃ちゝいりはせそこ　秘 明石女御し 花
女御もらんかものて私りまりて多はせうそこ有つけて
ようりいきのこきのひて女御より源へ御なきし
しほつけてぬ　源のへ申し
はつそてはさらめて　秘 東七女のうかりへし
御りもなりとはんかふ　む 是ハ源氏ゆるし

秘 源のるし 花　うちてはらんはまあらし
たくかれはくてりの　是ハくはかとのようにひきりへあふ
てよろこしたらく　花 いつくしうてさうしもやり、やなはにし
おもしとらるて　花 此ハ病てありしてみいたとなはとし
御かくの乾さらて　必 女三宮よりミいちにかへし
うれ此かうて　必 朱雀院よりもし 花
あわしく好みんとて　病人へあとりへていむる例あり菩と
ありよ東門院のうちなり
此のうちゆきりうちてあ　六条院申し
此人うせめひつ　はなとうせあり源て世をそむき
ひとて彼しりミ声ありくしいとはくしまかて
御よわりおもと大くしいとハ　勢ハおおの源のところのひとへ申修法
よくとうるとりもうるくり声とふりはるおあいいはるし
いさうり給とはしくそひかわきこゆるを御
秘 と出家のるかなりと 花
うれとありぬきそましてて　秘 源のかし

命婦かくれば名おし眼おほひて世上の悪とみてふくりん
るは御いとしのもとの源のくし
いしよりつゞき
きこしめしのこりけり
　さるしみちらくてりけり
まかせてつみて
かしこまりてりけり
　秘　源氏のうつりゐて
　あまりさら有てうれしく
　秘　女三宮のうしなひ
　　日しのの内にも女三宮の
花のうちのへてハ
これ花さき
人目よりの内宮のひし
　秘　六条院
　兵　六条院
身もみてとくしもさこゑ
　秘　内　源氏なり
うきこさ御心ちにて
　秘　朱上二人とし
　女御の方
諸こさふ内源氏のわかりけれハ宮のやうの内へ
　朱上病中にてあるにより
女御　内ハ御まゐりまいらひ給ふ

かう宮のいしうのゝ
　兵　明石中宮後ニ宮りみた宮ゆるし
　　永長九十ニ夏唐抄為女一宮の口に選
　　為女一宮の中一度ハの宮しき為女ニ宮符合
　秘　女一宮し
　　秘　女一宮のあそかし
　　秘　かゞり女一宮の中一度ハの宮し
　　秘　秘　遊逸院の前なり
いとうるひあまりしも
　　朱の詞
ゆゝしくもあし
　兵　源氏語り
秘　内式一條皆源氏の御とかくやり
　秘　くてのけりて
さもりいの
　兵　宮しうハ式位け文字
必　大るハ有もこそなるとも
　兵
れさてられるけるたき
ひかりし
　必　朱上の御有心ならず一しとい
　小取字小得福大取字大得福　孝経至德要道篇
帝範之睿之則不可処以褊隘之器不能容以溢漢之流百石之車不可満以斗筲之粟何大
非小之量匪非宜之宜
ことなる人ハくしくいひなから
　内　老子経云菓之勝　對　古菓齒對齒先舌モ　天下莫不知　知菓弱者久也對者折傷也

河 夜居也　源の御さふし

しらぬことゝて
御心のいとかなしけなれは
ありしよや我か情ハ中納言のめのとにいまし
此上下ハ柏木の事をいへり此方ハ条儀にて我か情と兼ら
いと皆の人なりけり　秘 皆ふれ人ハ人なりけり 花
おりふしのあはれ　秘 女三宮の事なし
此宮の女の女宮の二宮なと　花 柏木の宮落葉の宮をとらへし
花 女三の宮の女宮の宮落葉宮也し
下らしの宮うれの宮
かしこけれとうちかへし　秘 宮うれたけれとてたり
なくさめかねつゝなけきて　女三の宮の事なし
河 うち乞なくさめかねつ更しなやをもてはるかに姨捨山にてる月見えて
をい おもひてハ女三宮の姉宮ハ宮の女宮の御ことなれは物て
なくさめかねつゝ世てハいかなるにてなくさめかたきこともいとゝ身にあまし
秘 月をもてなくさめかねつらんや二宮をもてなくさめ給ふとし
あなくさめかたくも打思し

秘 わか心なくさめかねつ更級や姨捨山にてる月を見て　此哥ハ古今の
哥とみえて大和物語の古説にてハ少しの次
月をみてなくさめかねしと更級の心ハなくさめかたしと思ひて
古今此二宮をおもひてなくさめかたき心ハいとゝ人をうらみて心
ひとつにしのひかねしとうたひて中宮二条院にいまし給ひとらへ
小姨捨山の月をしのひかねていふにもいはれぬなくさめかたき心ハ
人の心はかりかたきものをしらぬ
りてなからへむとし　うそめの清君なくめかたとり
志ことの心　女三の宮事し
宮の宮の御後のめのとの　女二の宮の御めのとの御後といふて
小御後ハ此人のむすめなり也 花　御後のめのとの姉ハ柏木の乳母し
それめのとのむすめにて　女二の宮の宮の御後ハ御方中にて柏の御乳母とし
うちのおもひて　源 女三の宮ハ此上の方やしのふにあはれなるにのと
くらうしなしたる也
まかしゆかしとかたり
むかしかたりのあく　秘 むかしのおもひのつとし

ちゝしきよなりけり　乳母とももさるも小侍従は待こゝろあるへし
それらぬ人めぬ人に　柏木ハ心ハしらぬ人也
いはけなき人ゝに　宗 此心て朱雀院をさもし
少 朱雀院より女三の宮を御心のうちに源氏にゆつりたまふ事ハ
此方にとさへ猶思ひやりてきこえ給ふを後悔しおもふへし
花 朱雀ハ女三のみやの御事を源氏にゆつりて後悔
給て源氏もさらにしなれ給へるかなまことの
御心ハかやうにして朱雀院もおほしめしけり
ふかくかゝしらす
清少へさうしけり　河 悔し
いろにゐひらくゝつて　花 右衛門督のけしとし
年ふかくなりたるにはしよそへ　宗 いへりける乳母かよし柏木の心
ハしらされさうなり　秘 しりもちてまゐる
大将殿てまいりて　同じ人々まゐりて宮の御相なる
さしよりゐてまつりて　藤裏葉にて女三宮へ
人のまゐりてしかしたまひ

さしてハ宮にまいる　宗 さうして宮にまいりていふ也
あまたさふらひけるを　女三の宮の御乳母なとあまたハ朱雀院より今
よりてさふらひしめしなるへし
此みや内の女房　秘 此ハ朱雀院
なりふりはさらぬを　さて宮へさふらひてはまうて給へかしと也
只とをきはいひけり　宗 柏木のいさゝか心にくゝおもふ
ものあるハ女三宮をあはれにおもひきこゆるやうなる心
花 今はさらし朱雀院の御悔ありて柏木にゆるしを
きこえたるを宮にありていひおもふとしていへり
秘 ましる説いはく朱雀院の今の心は情懇ありける人へは三宮なと
御あつかひせさせ給へて侍なる御けに
いとうたるゝなりけりや　又小侍従の詞
り侍院のことにおもひて　秘 源氏　源の今はひとりたちにてあつかひ
この院にてもこゝろのうしろめたくて
秘 中納言の君をも有るへし　河 かしはきの衛門督の中納言
になり給ひて中納言ハ三位相当し三位の袍の色淡色なとにいふへし

長 中納言にかゝりてかゝりて位の系儀より三位にあかりぬ也

河 天武天皇十四年七月庚午勅定明以下進位以上朝服也淨位

位已上并着朱花 此云波尼緩濃 正位深紫直位浅紫勤位深緑務位浅緑

追位深蒲萄進位浅蒲萄

天武天皇大宝元年三月甲午始依新令改制官位号位服制親王四品已上諸王諸臣

一位皆黒紫諸王二位已下諸臣三位已上着皆赤紫直冠上

四位深緋下四位浅緋勤冠四階深緑務冠四階浅緑追冠四

階深縹進冠四階浅縹皆浅冠縹帯曰戦黒草馬其襴着直冠

以上着皆自縛口袴勤以下着白脛裳

柏木はまさりて系儀右衛督後に権中納言としてかゝる上の位

小路て袍にめて浅深有し鹿明に天暦五年二月任権中納言

叙位三位 元系儀正四位下右大弁 時九条右大臣送袍并表 後撰集

おりひとりやこゝろをぬきうらへ色にそめにいろとさしもは

貢房紀めて叙三位着改袍よりつかへたり

秘 秘 小紺位のなし

以上いまひなくやつらうすた りしわ詞し

今るらしもあつまてらし

いとおそろしきまれハ 源しおそろしきんて

らまとよりとほし安なれ 秘 小紺位の詞し

なまめしふかりつつんと 長 小紺位の付し小階のりとはさんえん

ようぬく 河 撥桜とくしいはてつまし

秘今かれせしり世位くし紀くしひもかてらしきなら

いてあるこさつみく 秘 りしくしなりの詞し

らちゝめく 秘とくしれとし

女御またあやうあらしめ 河 五条二条后葉のはゝしまひらぬかさし

後撰云みといいてさて後京極のたまふけり 元良親王

徒然にはかなくなりしおかしなるをとつらてて河らんとそてかりへ

長 業平 清和の女御よみまつりける

必 二条后なりの御ためへし 秘 女三宮なり

ようてそのはあまり 必 果とてよきされのへる

うらくいんやまりしきてとて

院のあまきのは申小 必 徒とハ朱雀し

あまきしの那しやのは申みて

さしのひとり／＼ぬきさかのいくらく　秘 明石上とまての内侍

みといひとへしあるし　私此川あうち給ひくに

西中はけとつゝなかれのく　に さつしたしはある右八ゑし西中れつゝあれ柳しいゝてあらてとて

にさてつまなりそとるゝ　に かりさうりなりゝて

秘 いひさうり給ひてとしなら

人り給ひそれきつちの首さ治ともゝ

めてしらつれてはつわつゝあめ　秘 いりさついるあゝらゝふあひ

こゝわいふゑりゝてゝなりしとし

あれいなのつゝゑめ　秘 あやさ海ふらし／＼めしらり坂の人しらは

落ちしのちさはらくかりしゝてさ海とも

ゝこゝふさしてて　女三て源とのつゐゝ三ふふさやうふこゝのかきゑ

よくりとひひとしゝら人　秘 柏木し

まことふさうらよらふなれ　秘 柏木詞し　源の内宥さ治とそし

なかくてゝしらつけて　らんとみえの奇さかハなれ行るてゝこ

なかれてゝいなつるし早下さつるし

あり門いさかとめりられとゝゝよ应まゐへのなりかりかまゝりゝゝ我

私云早下しゝつ而ゑあへし　秘 心よりきハ貝化西夜ゝす出来ぬる

まのゆりゝ経ね　秘 小侍従　心より

えいあひとそ　に 梓 イナヒ　柱仙岳

さりわへさひひきし行して　小侍従りてゝ気ふし

流のおえゝしゆさね　源のとゆりまかね秋し

いゝおろおりりれ　奕 小侍従の而めゆるひさる姓女文のなゑ夜すし心従

いゝあいゝふゝ日ゝふ　秘 りしたゆし

せめしまこゝしくて　柏木れとあきふ／＼ゝゝひまさゝし

をしてこしとこせゝり　如しえ木一小侍従とりし

よろてひなりし　奕 よまつとひしゆ而し冷しと云詞と申

我ゝ而ふとしいてすりしゝね　秘 りしいり木気而し

すゆりしやゝしとひとゝ而ここもさ也へきすきそおこゝゝもよゝおき

如 女三小侍従くまゝゝかしろゝ人まをれ柏木れこゝよしぬし

卯月十余日れのたりうそさあきゝく

に 四月中午日無内親王禊す　見年中行吏

秘 女内親王の賀の事也　許院の御賀每年此纔也　中午日也
その時ありしは同日女房も具してせ給ふへし　参来ふは賀は午日とし
うきしれ給ふ女院よ賜りまふ時の此賀たる吉也とえう給ふよ
いはらく空日なし　每年は中午日也
よらしふさなりぬ
少 よらうはとつえなれてうつうとりくいられて仰よし
奥 鬼ねはかくすりふなつり
をくさふし母ありさらは恙なと　弄 女三宮もくさふし母女房也
源中納言あくよりひ出させ　少 柏木は君此折りひくへし　弄
虚とうは下これにんりし折りくれをまうしれくしふ
弄 これ折りのまますそもとひようさもししうりそ不可然也
さ面そとしらうへきるうなりやと
秘 柏木の評也 又は柏木のむし是程まても宍ひうさ[illegible]也と
文もなふなりつく　女三宮也
於とこれ宮まさひ　明しもなし
院也ひおそひりと　源氏りし折りて
ゆりれしもしふ　河 康のまさ廿三人鬼気の及うさ也　見岑桂抄

弄 夜あらくるしとえしうり
あさもりくむくつけく　女三宮のなやし
とあてさうみさ候　これより女三宮の御也
う次なうれと　秘 うし　柏木の羽
指宮乱おなの仰しと　不あ庭の事あうりおりひけらそ
まうりしとし
ひさふあふこあさく　中とふ一向ふ母ひそそくいうくさる
ぬまりしさとなり
院ありときこしめされかし
志めされ侍るとし　柏木のうへは菩薩とも志らぬ
めくえられてとし　ろうくえまもしさすえ仰う違さ候也とも也
みすなりね一ささうふ人より増りさえなえうしと
柏木の身此源よ及りぬあふ源より源さ柏の芸ひはむすうし如さる也
うしうし仰りかし　先 肯此悲面も勤まうし
秘 面をうしもすし
いうそうり志て仰りふけうりのゆ　河 深曽木　日加紀

せきこゆく
つらきおりもあらなし　秘 今よ制しかたし　拾
これ人なりけり　肖 実事あるにはあらすとも　拾
あとはなかれと　女こゝろにはわすれと
なかしたの事は事にあるなし
ならさるかはたなるなし
よその物かたりやりけり　肖 柳木は女こゝろとさかしきもちゐたる詞
秘 文をおこしたる事　拾
肖 柳木は事よおりかなし
秘 よりつきかくさやしかるかたしと兼てよりしあかなりけると
けしきさまなりはなかく　ならんかなるへし　うなきへし
これかと同し事して又ひかけたるひきる事なりや
私 河ノ義めなる色して実儀なしておんへきとは上ひさよう
河かなし不足ひかなるに　柳此上なし
さうしもおりひて河よりる事としりせく
女之の房のたいの事河よりうね中へかうれこゝろくなり
あくるし　河 将(イテヤカヘ)深
業平二条后具し身くへ海川し夢なるの准次

秘 伊勢物語に向ての何のこともなし人の向時とよあるをも有へし
人もいさしのまゝに語ひとるもなそみ
〻これはよ実あるうちにこそあるし　河 睡(ニトロム) 遊仙窟 坐睡
てなかしく孫に　肖 懐妊の事し　夢歎は懐娠之相し
肖 身なる事侍るとさてよ忘るらんとそかくしこゝろをしは文よをつ
きく事りしかるおなしありふみなりつゝらんとなりよもさ宗
浅のかとてかは上ひて後悔もへきすとしし
なりかくそもとりつゝらんと
秘 業平此今ていることと上みへきりのそと物しうけるへし
拾 業平事としむ事不通しなるらんとよ事よ文さてはあるへきかりしとし
こゝろらく語し　私 西宮ノ民も物としたるへき
狩の使のれね　秘 うしいはれ中あひの詞
浣かとそんいのそうし在らん　秘 深し
私 女之此今中し
人の阿娘とさへのこゝろ神さそ　河 下友螫神与娘子拭涙ヲ 遊仙窟
秘 おとし語さ詞し

いつしかゆくへき　　　　抄 いつしかは末の詞
あのさまにいそかれしものぬは　　柳本氏云 女三の宮いそかれぬるを
とそ〳〵いむく佛をとてそ　　　それは末の詞
さらは物すとなかり　　　柳本氏詞女三の宮へ云らるゝは柏木の事也
身をいふて〳〵やいなしそてぬ　　河 葵出九男といふて〳〵ふし　不及此分
いつかふなしはてにし　　　ぬは前にサルノ心也
いとまてるさまよりてすそ　　　抄 いつまてもいしなとも気也
あつかくまた門屋まてなり
こよひみかきり　　抄 影もいふ　弄
なれぬ入門　　露けき御衣裳の袖もあはれと覚ゆ
おされて御傍さ分　　女三の宮也
ひめのよるとお傍されて　　御らんしに柳の心と女三の御あはれ
絵所の君よう〳〵見もせさう〳〵行る
られぬ成そ〳〵都とし〳〵かなし　行
あられたなる夏なりとも　　秘 孫この夏ならむとも

弄 被此らし夏の契り云しまいしてとも〳〵花の色
いまおかしからん御心　　うらみと懐妊の事
弄 孫こ此夏懐妊すとのことものとし　いへり
秋の色よりも　　抄 四月なれとも
おそそ門とともいふ〳〵れぬ的くれにはいつ衣の袖也
抄 此哥はてふとをみといへるかなしいつ此とし色と座りてうへ
弄 正徹了芳のこ此さる〳〵此色なるへし〳〵禅閣は此ことそこ
らなし色めとも又云なりけんと詞とそ〳〵みかへしこ
此らめてふとそこ古今ふ拾遺し此集の詞はおもへていつかと
みそのなりなり第ありふ又さらひなんとそなりなりさ
後撰恋ノ三四月四ふ恋ノ三なる川なし次猿丸し
恋ノ四おもひはそとられし此外古今多し一の勘入
抄 おそそ門鹿さるとともし凡也謡曲第多ノ説にいつ此をそ
られと色と座りてうへ也又正徹説此時柳本色に
色とおみ門の方なれはてふとそ此色を方と也袖なり
それといふみしゆくさし此方あるさき　待後撰恋ノ三四

哀ノ之
あはれ何なりし猶そのかみとさへ嫁斗此露風吹になり
哀ノ四
おもひいそし哀つましけん山ひこ此ころ人にこりぬ心あるになり
此歌二首歎かしきなへし　不審に不及也
義
歌にいつく此露のいつく此露みそそくいふ心との文字みゆる
世をいぬ此袖しとひきいそくのせるそもつかくし其為ノ説そ
らぬ此露とこと　又云てらにおもと杉遠の義正徹の義し又れは柳(?)
此衣しなおもとこと　又てらにおもと杉遠よりもとと云俗例なり
なへしさ川なりへし　後撰哀ノ之　いひ出て哀つましし　同集哀ノ四
義云哥になりは旬何なれはこし袖しの俗例にわはわるしさる故俗
なふあかりとと云也何たりしと云心なれは袖なりしと云俗例にて
解し心うるや好ん不審なる義し
おなんとかうにまうしなつへき〈?〉
て女三しまうし心とあらしさかて逆房すうしきうかと云先文之　柏の立出してまうに
出んと何の何柏木を女三此たつくさかてまうしやらんとその返事見送
返女三
おけふれその煙にまうち見れはこさしありん薄しなりとこそともやむへ也

秘
前にいりのそのこかいきりしと柏木此出の心ふ思ひそく後なりに加へし
心うてしたなつる所哥義也
さこと云もみとたら郎く　河　あつきやし袖の内とやいつとぬらん　おかんイ
うらみしめの女の義心らもる
必　候ノ字如し　あつきりし袖の内とや入ふらんの心なる
義　おもてなふの内字服し　川斉同し
女宮の御かしかるを　紅露草義し
大との心へそちのゆく　義　歌に残仕ち様し　義歌同
落葉に文此ここへ立入まうく　又却て此けとへ何まふなうるへし
こつる葉のさきうふ　義　聞に猫の夢此な
そうたつうしき　ひ　見おもそ旅しふ心し
義　歌に回智のんなり
女の御ゆ紀んを　女三乃也
いとかうゑりしきてし　義　歌にやか此君ひとうる可に小頃旅可何
本耳いるまし三るなれとも笠いなしてゐてまししきゆうとく
くりとの其め彼とりかやまうらく　河　妃　日本紀　御書　日紀

女御后の歌のうし

くらしもしれかたあらし　これはうくこれおなかれけし
きらいちきらきつくふき　女御ならをおやまもちて飛ふお
こらやしふなつくとゝめゆらかり
比院ありめとそけ給へき　深の御事し
文徳天皇孔上湯人ふとしいふり
つとふりなる歌女しすゆきし
世人といひて　二条五条の后たちの歌し
ゆてりりふかりのよくゝ人わかれとし　世の人といひて世なかれさる人ーそらく人は宮にて
雲に色はきた藤ありしよらね女し　色はいつとしふかきれたるさとし
よ川さてる　雲中色は世とよく知てる人なり
なかりしすふつきりと　うく人をゆへてくこれゆりしくら人は大やう
みして志りとたれ色をちてらちし　さやれ人ーそ知かれし
すみくとてもおれとし絶らいあるふつきりおきゝ人と云き信る后
ことなる人のはうと実しらり上るに五条二条后れ歌くは家にの御や
心は深きたとおらせねと　女三文まて深きたとなりしも也

色は女三氏たより文めりし　くらく志のくまつるすふそとなきたり
ようかしく地れちしおさふたよりえや人くと志たんくとかりきておき
へおそ液しきやしふ名傍そうれりおそし人ゆいとうとし人をさとし
さらりし品情志ろれし　女三文の帝にもとひ知りおさ木しとし
なやまいきふなんと　女三氏たらりしむれ孫ふよりし深へやさるし
れ色を涕りしの金まるふ　少　染殿后れ病脳よりらそつてし　新
そこうくしなく　女三氏さ御し染殿后のやしたる紛ひのそしれ
なしと深のくさのふなり
久つくなりね影さしさ給　寸　深の色し染殿の紛ひれ久しくお世
ね前ふ女三氏やしふらちむつりね座しみしすふりよの色し
み九ねうちさ夜なりし　秘　染殿后の事し　新
久しくさらしも給ていらんと紫殿の紛ひのさ夜をれへおふとし
いろけありしかりしより　染殿を細おとらう皆れ方のしつけれ里
さしくらからうくし　きりしとし
比刊しみをさだけしなつくし　深の女三人のとる人をこしていとし
文めらく宗りしきかと志り給のね　女三氏色し深の門

いまはまたおもひかねとおもひしを 秘
くんのおもきを 右衛門督し 秘
中しなるらち 総のすみにひとゝくらへさるし
ませりれ日 秘 所の月し 異
あつきひゆく 私見ぬかはよ歳一ぶよ花んとあつきひゆし
なん見ん也し しいまのさ傍し
女君ときこえし御りさか 異 二宮へし
秘 落葉宮也し 家司にうちしなといひなし
しらかへつふえれきゝく 柏木此体悪示し
くやしくもつみをかしに家の藤壺に神の中にせるかさしなるぬるふ
秘 橘よ花とよせたり 橘さくと花と死をしてよめり
女三宮の身を後り神の中のまるかさしなるぬとは源氏
此事をいへよめり
人臣りなるねつれしふ 系とはことまりねなつれてなれは
人臣りなるねかり
女宮もまゐらせたるまゝしきさまを 異 女二宮し

ゆしのことなるつるし月し
今一ところは 秘 女三宮といへり 秘 落葉宮也し
もろこしの落葉とおもひしひとに名をゝなるしさかさしなれとも
秘 藤壺槿のかへりし女三宮は落葉宮と見ゆなれとも見ゆる落葉宮に也とあり
異 はしめてゝとは藤壺は二葉にあれはこそ此文の後撰集と藤との二つを
さしてさへ落葉と何ふしいふに時を藤壺はとらへさる名は也り
ましきさま同し朱雀の御子なれはなり
異 藤壺槿をもちし落葉宮は女三宮とよめり見は女三宮とめねすと世
いとなき宮なり 新 二宮をといひなしけるといへり
秘 前の身に説なり 異説
おほし此君をまゐれしこまゆり給く 源のたまひし女三宮此の
おほしまかせ給はなしといひかへら二条院へ渡りまかなるし
ゆりまいりすひぬなとく 朱雀の御事よ深く見ゝめて
きよふりの院を 異 二条院し
いとまかしてしく 河 花云 万葉
新 曲し出られ給ふし

さるへきさうらひけるにおそれさせて奴
裳 歌 是ハ不動の護持儀 夜
君の御なやみを退散させ給ふ御身の次第の法なをこゝろもちゐる
は壇をこしらへ退出すへし
おもふことさりつゝを かくしと申すり出すへし
さりとも我かの身の 少 高きに源の名をとなへてつゝしみおかす也
不動尊は此ゆゝしの御ちからひて 本誓 モトノチカニ
所 大般若経云 定業亦能轉 正報盡者能延六月住 不動
義軌 金剛手光明灌頂經云 世吳不動立師軌後次視身成就
為形状一百由旬所有親調御鬼神所持者皆悉能敬懐
秘 定業亦能轉の為也 所海よみえたり 善無畏三蔵之師欲
滅弟子為受灌頂善无畏行此法悉受灌頂也
新 其後経延年之支在之
裳 歌 能延六月但 トアルニ 付て能延六月之法とて秘法アリ今は六月
しかるをまた一月よ一つゝより六月にのふるなりそれを見え
今ま法実名に能延六月といふてい

それ日かすなくさに 是ハ能延六月の法をおこなふに日数を
さたかにいはんに七日数なし
と申すにつけていつかへきかと 裳 歌 源の院にとくいれかしまきにをいて
仏もこゝにあり 源の慈悲の源は切なりとも仏のおもひにいかなる
由りいきさすへし 尊との穂生しけるか見ゆ
いとゝあはれにきこゆれく 裳 歌 かねよ金剛傳にてかなふなる
尊綱依し 東寺云綱 スト 云ト ミ
てらしてくひさせかふるさけあく 抱の事を編しくまひ
さすかし抱の事此いふかなり
招ゆしあらせんと 新 歌 尊とをとらんとし
命をとりかへましく 源の命を延ふるなりけるなれと
今こそ叩くいのしさまをとうけられ 裳 歌 悪におちて生かうかなと
充 御息所此なる身をもていつくしくさまそいふ
いかにへの名此なりくてそ 今生かくの桃名にひかれてあるそ
是を見く此ん能は今を源の所にうつて何なそかつらかれぬなと
為 秘 勢も此けうし 抱の事也
有むかしへなり抱の事也

さ夜ふけて　袋草

あさましくもかく思しとらしたてしかしてよのかはしねとゆしうれい
業の時より流されし去事に源の云ひかひしに又かはしね
さ夜ふかくてうしもいさしし去し業のとよりくる所々
出たるにその人か　源のりの宿れつきくる壹に存する何し
さつてなよのたふかれさるかの　河　誰　タフレ
此句のつくるも知し

又哥よの云ひさらんてよの　源の人ぬきゆるく人への云ひら
ぬまりと朽の宿ぬ云前之也
かろくといゝくる方さく　朽のけれさ夜し
まとう兄てそて行うぬさ夜なりそれ所ろかうの心まことる宮いまし
あるぬさ夜なのれい出れうりらし
拾　朽の宿れ於しそれあつらは源氏さ云りするへしたる也
秘　朽の宿の哥しまりまてて出きさえしれとし
りのえらさてるもとえひらう哥
業寿か也朽の宿てうちゝ源なりたり　如息示の秘れその去しうち

朽いたせしと於月を　秘　源の朽いたせしとし
中文の何るかそまし　異　秋好し
秘　朽の宿れいるし
君てらかたなりぬれさ　異　生前死後に至のかろうかやとし　袋草
これうへまそそも
拾　子れまともあらうねともなり　如息示の心し
行さらうしゝ流らしゝと思ひきこしさよなん　河　執こウ
袋　中子のてらかとは死後にうまくなりの所かれ執さ後の世まく
てとゝいかれねとし
いきそれ世にゝへよりおもしく　袋　中生前て所まさひ
もくまもようも死後の世そうりのうられつてぬとく
あよられ何朽うり　秘　方に生まさへうりまひそまし　異
のようし次にくらし　如息示れ何のさへんしかくてかく陪のひとく
袋　中様の去に生まし源の高雲れ何まさ源りまひ時とその
流の裏に蔵雲を源のうなひしし皆冥に海とまうもし
あききにお何しゆのしく　拾　たらふききくりうる也

なき世の後なれと行すゑとやかうすへもおしはかるへきうし
まへとしはらふきは見明らかにひろめて物よおもりの給し
うちかはしけりつゝしりうしろ見れきこえひあれはしかも尺あり
花 御息所の御中にちとひしみよそし
秘 悪鬼（き）なとしかなれは一そて立よるとも病ともかんするに
あふなきやうなること
少 強云ひのかねなりと思ひしあるにかんありとなき根なゆるも成
といふうちさへもしきかうろ見えし
私此義たゝ先秘よいへることく卒度立よるとも
病をなれ人ゝの我のは立よるなるへし
うたかひし給ひけれ
立よるなり 弄 霊なとの行つかひ也
私此義いつれも秘ノ義を用へき也 弄 たゝつゝしくとあるへし
これ人をゆつくふくろしと 秘 時ゝとなり
後ゝにも法よつく 秘 深き御ゝとりつゝしてもよりそつきさわるへし
弄 御弔のまとりなり深のるし

抄 深き御ゝとりつゝしむきみをいはるこの人となる以帝ら如也
時ゝとなさしく物の事やありとはちなぬといふ也
このつゝしみ給ふなり 少 行かねる思ひ乱れのはに苦痛ありつる
其物脱けるかつふとかゝひをしけれのいはのつらさある也
脱（ス）洗（おつ）ひ経のさまてるも 孟 大般若御讀経焼損邪氣之
是之由稲荷明神告貞崇法師給事 見延長八年李部王記
秘 花鳥ニみえたり 箋云死霊者追福シテ令得脱之法力
也其霊乃告卜哉（ハ于事ハ不當）此方ハ如此死霊ノ心ニハ相違ニ如何
仰免所文つくへ 河 労ろし
斎文おもしましいふ也 抄 斎文ハ経仏とをいはるいふなり
河 大斎院云前斎院之仏経なとの事をいみせさせ給ひしれ此院之仏経
をさへいつかせ給ふ毎朝の御念仏もせ給はれ 大斎院撰子
おもへるもいまとそいらねてなれはみちうるさむさしてそ
斎宮寮忌詞内七言 延喜式云 仏 タチスクミ タテコハクイ 経 ソメガミ キガミカナガミ
塔 アララキ 寺 コリメツ コリタチ 香炉 タイミツ 尾 ツラハスム 斎 イモイ カタナシ
箋 花鳥にものせられたり

ゆかしげにめでて　河 紫式部　物の寝覚とさへ河ちこなたくらちをね
宮にふ紫上をはしつくふかうかしまかて
いとゆかしげに　契 いさ出まゐて人をうさ思し
紫上の宮にふうせまひとみやしかとゆかん人をさとりしく覚え
さふの人さ　秘 賀茂祭なり
弄 賀茂祭にむかしいく人さゆゑし　所とる日かへさるし
いつかひるつるさいてひん人のをりうしさふ日ふてあらは
弄 紫上とみえたとうしさふ附なりのあふにて見ぬといひて
此 うくされうちつ寄てしは見り
を見ある　河 伊勢物語に見えひのついちらをそ見ゆるに　曽法雲 真名也
並葉にあしれそ見ふかしいう栗しそかはきうしあけのそか
みといふ内は丹ぬりしある小舟也　日本紀穂とは曽保佳と
なふをさくるふ　弄 ほそといふにしちつてすれの也
河 ほそといふよちつてしとあるかふは何と採まよらる様さもし
ちれそうそいうし採ときめてらはきは無まかりかへしうるへ実
義 ゆうほそといふにし

二条の院に　秘 女三宮也 弄
りとのほお月し　契 かひのあいの南なりて見へし
右近の前　秘 内車しるくし
御物しとの　弄 弄の後に日海さとしる也し
うしひねえうをさしふもむつふれく
秘 紫上の乳威なりとひいむしけり　私 猶是此会しうくひ
わえうとは紫上のうせまひて女三宮此ほお月しのあらは
まんしとく人のいふも心うくむつふうしと也
なりかうらる世ふ　義 ゆうちらきそすそいとうし 採はし
河 ちらきそすれといとしさうくはあくくさうれ何の浮世ふ久しうらへさ
弄 奥入ふおかると無く哉そあくくさ説しちらきはすそいとうし採まし
式部卿の文　秘 紫上の父也
大将君　弄 夕霧也
いつふくゆかし哉　秘 うしいは女此詞 弄
ゐて久しう見ゐ南やうくを　かしこ本用捨のてふるかし
いとおもくなりつく　秘 夕霧詞也 弄

まつあやしき心地なつらひ　柏木はよろつあやまりをとおもひとりける心な
らひに夕霧は紫上に心をとかく深くとゝむるらんと
くられなきさいり
おり気色さされ
ふりしもえのとめぬ　秘 源のこゝしなかし
心おきなかさりしとし　源の羽重き病となし
うつくしけれらしろりかしける　女房ともはなやきさゝめきさるに源ノえ
　河 宰相し
孟 忠あるし　宰相はまつみくいかゝ深きさそく也　実はそしきおもく
ろく也し　總　又云紫上のたゝり源氏の心中の悲み宰相に考ふ
云とれるし又云自由ならぬ心をやすめてはのすし柏木也
少 花鳥いつ共不自由心しらを前より見てはい
うちなるされてこそ気りされとし
ちゝきるさ心つりなる　柏の事とおもふなるへし是心はそら
さらとあれしよりあり
心のうちそこいよりりの事となし
いさいかおひく　紫の藤生はましし

うけし人ゝまくに　見 現存の時さへし
紗 源の心し御身ふさらつれ時さへ気のとかりかうし　明けしとし
おりいりあやし気　生のうらりに御身し
いひとくゆけし女の身に　河 所有三千界男子諸煩悩合集
為一人女人為業障女人地獄使能断仏種子外面似菩薩内
心如夜叉　涅槃経　見 載之
秘 女ハ業障ありしを延 涅槃経はとりいり河海にしるせり
まことし知れし いつおかに　源の紫上のむつことの語をはふとし
おひ合すみかもとふにめ見ふの心さゝめともむつらくるゝ程
たしきにおかれとりふれ
ぬらしおもらしてんと　紫上そりをけるなく見えとし
又らひうりさけさせ　見 男五戒ハ沙弥戒也不及十戒ニ
五戒諸王経云一日一夜间持三帰五戒人生世天中所守護
又持五戒人廿五神王被護又以清浄心合掌不生他念人者
命終時生自摩尼天經意
悪法文云言五戒者是優婆塞 此云近男也 優婆夷 此云近事女也

御ゐるゝ事さへおほつかなし　紫れるゝ事源もそひおもすなし
よふりしうく　蓑　守ほどの智者も賢人も秘義に及ぬ時は
ならいの光は空しと也源といふ事し
いふなるも御してうる　蓑　主君も不眠気服と詰し
ねうかとすらし　源の御さ候し
さ月のしやましてえれしうぬ　蓑　守ましてとりもゐる物也
ろしえれいしかうね　さ五月雨なるの御し
物の気れつゝ　御息所のとふうひ
ねまつりしちうくてとし　乎　紫おとれ枕のかとりと
あみんのとく経　蓑守　禁中おゝねく六字流は境中なれは
後経といふ此經は大般若最勝王法華経なし
おりゝなり宗なる　乎　物の気し
なの気やうなる事なちふとし　紫おとれ人なり
紫まにい物とえてねうちふも源の事なりとひを難しく字なふとし
とひおこしてゆなと　蓑　守食れすなるへし　蓑守

おりひく候なり人おれい　蓑　守とひくなまのをうらしかくし
行いとゆしくく　蓑　守われおふる見　乎
六字流ねさ行くさ候なと　乎　いかなり物よ紫おとの病をつけ
うりし時に気つきて源の女之れ也見へいえおいをねとし
姫気をおやしうし　秋　女之気し懐妊し
へゆらねる腹とり　乞い五月とハ十一月女らはなる二はに腹し
その人なうりなく　秋　柳木女之気よ又も叫ふひし身乃衣　乎
蓑此屋しふとなり　蓑　守　柳の気と始り宗ゝ叫なと女之とおもり人あらせう
なやいうなるなしいつまとあしさとし
流おいとしう　源の事し
ゐりて候と人の物とも　蓑　守　柳と源との事し
いたりよしめき　蓑　うしろ見れなるくし　秋
あつしひ大の気にて候　蓑　源氏し
秘　源とおさなくうりなれみゆめくつし見るいりとそくうう
うくあやしきふるを　必　懐妊のかし

あはれなる所おほくこそ　箋 此あはれなるは同果の道理なるべし
いみじ　宿縁なるべし　細 皆懐妊と有事也
こゝろそきよりゆくゆく　弄 女三の懐妊なるとつぶやきたる也
院のうへにせさせ給ふ　懐妊なりしかば大事にして給ふ也
源のおとゞうちとけ給ひしが懐妊なりしかば大事に思して玄旨也
くるしきやうなれど　箋 女三宮の身の上に源の六条院へ抱かれ給ふ　弄
細 六条院へ源氏もまゐり給ふときこそゆかしき二条院のうへとのみ
是物語の習也
つみ深く　河 諂　嚶日上
女君たち　秘 紫上也
物しなれしうらやかなり
病おもくなりゆく事　箋 病おもく暇とりし給へ遠く立ちよりし
なくうれへしき御心ざし　猿のつかさをもし給ふ
文にさしとおもしろく　河 悦青　又小青
箋 あまりにも目に見えしかし色は病後の事にも見えし
箋 いとも紫上と揉みかくして着るものとみえし

弄 さればこそかくとも一なアリ内さうなるまじきなり
らうたげにけし
文王弟問 イタワリテ　箋 弟し イタワル　源の大切にさるゝ也
りあはれなるうれしさのいかなる事とこそ　河 悦し
とりなしまゐりし　秘 二条院
おもしへなく　箋 なくしへなくと也
わかれにいはひて　細 心やすくしへ入ぬれ　物にて
奥 紫上なやましき時を又いまひとつきこえしなへるとも
かれら後へその事ひとりもおほしけるは　河 源の親
箋 おのれ独は源の心と紫の御方にあそびしことかこそにありし
かくもおれはいとやかくなどこそ　是なりと也
おきながら　紫上也
よろしきさへゆかりて　箋 紫の事は白縁源さへゆかりと也
てんれいしのみなり　秘 紫上也
こゝろにかゝれて
わすれ
きゝしと後かれしやは家へさるべきさまにたえたる物の庭れたる斗を

抄 此本との氣露の御こゝふにへしれ頼からさうとよめり
或抄ニハ通途ふとし 季
蒙 蓮の露ハ清くまするぬ故し風あれハ浮なしきえと今ハ清於色
追源 ちまりちらんこの世なつてもこちた清なふ露か色ゝの家
抄 色々ふそてあまのふうし濁の季し
抄 一蓮托生之心後世を契りし
蒙 各留半座乗花葉なとして夫婦ハ一蓮を契り置き出来る
季し あしらんとていつ後ありうし前表し
いつまふうるき留る
円あと浅ると
めふちつ季
たやうのふと 今上と朱雀し
蒙 女三之宮し
今上と朱雀し
秘 此本ふうし
うくあちらふさんへなむり
秘 病の滞し
季 此本と我病の滞しきこふりし宮し
蒙 此本との飢のひさしとも思ふあきしいふる二十余よ
な服ハ志あそらひハ雲あやといへて
季 又月雨れ後のふとふうまり今病の也きし

文の行ふれおふく
愚 ふのふちれ備ますとへやこちらんとおりしつとふの思と
いふあり
日比の行そりりと
蒙 源るいつののとこうえたと女三のうらむりつとこいまつと
秘 源ハいつしとこいまつと
まいのさ宮なりぬ
あやしくふと思ふく
秘 源の心と
秘 柏木の備ふとし 愚
秘秘 まるくふう学清色る頼くへ 蒙 此本よ頼らへ此五頼
季 女三にてふう学清りめり
蒙 柏子の此未来んなくハ我よりらく此来んすそと不露よ源
のこいかうとし
季 明石中宮の思後何色の服すと此子の此来せぬとて頼
へうとなきも又人つしく源の女三へおちとせさうりしすと
頼をとふうとゝろと
秘秘 まうくらし濁すう心るも女三の宮乍海へおそし後
いうふいちきうすと生まれるの年ゝ名のしきまりも此子の此のあきよ

といふ云こと次ノ詞よりとし此段ゆかん人ありけるよりとあるの
まで源のしうりこと也

とし此段ゆかん人と　箋 昔ハ源の三人のうちをさ隠と
業平ありし昔ちかく里あとの事と云也
不定なる用ゆる　箋 昔はかく知りしぬ物のとおとの用ゆかと源の旅
業たり
かうしてさとりけり給ひしかハ
箋 やうしくまうかおもしてとかり
二三日　方行かうか
いかにく　秘 業平と云りとあらぬ心ぬめりこと
いてや思ひぬ世をとも
泉 業平をたのみりし給へと女こゝろの気とりくあり
いつのあり
子ある君此所あわまうら　秘 女こと事と

泉 女こゝろ家業と　日 此女とのこハ源氏業平のうへなり
女こゝの此身よあやまちの心を志つめん人の理窟よいふと
物語そうおもふにけり　箋 源の二三日たちけるとりの
秘 源の此事と知りのたいぬさく人業平よハいひおとしめする
此柄のことと源の知りのありいひいひわれんと小物語を書
この人とも　秘 けしからぬこと　愚
かくありけり　源の世にしれ行くへし
世いへありさ源よ　箋 業のおもひぬとし源の對人用
とありくおもしきかなかるへし
人のまなりなれハ　人のまちきこえと
むかしきこえ　女この詞と　多のうち
なしつきぬいとおもしく　なしの多まかいとおもしきこえ
人の采ありとりていぬべき物語がれくそしてまし草
うしよろきしらハあるに　秘 源の詞
泉 此比けるの字を濁と　秘 源のまる清て用へし
いとて多しよりし　業との事と

ゆめなさき　女郎花のうちえなりくつかさ根とみつくして源の
こしめりのくんなくとのありしさこさまつくのやうなれとして給事
あつ給ひらの和哥かうつしもなくさ給へくれまつの初也
秘 女郎花の所寝也
いつくもありりく　源たり
おとろきのいて
月まつらくとらいふなり　秘 女郎花の初也　夕霧といは在りとしく
同 夕霧といは在さとしし月まつらくく玉かつらせこそのまいらさん
箋 此らんさうよ内侍りのかるせめく月まつらくそのとして内侍の司
まことにうきけり哥とこきことにとうのやうし川舟も石さとく
ありぬと源の、よりくりより出てうりと
そのまうよりやと　同し哥の後なし　源の初也
女君 夕霧よ秘かうせとや日くらしの鳴をきく／おもてをけらん
秘 此日くらしの鳴初まくいふうかまし御せとして内侍まへ〈言〉初とし
箋 ヒクラシ 蜩の鳴る日の暮つ絶橋し其れを受川、御りのかいはる秘せと
ゆうせきのきりしうきうかと
うたありたりの　箋 女郎花の哥のい年よりりしらくおもての初也

あれくらしやと　源のとは也
遊 女 あり里といつくきうくらんうこくよ哥さりうけ日くらしの事
必 二条后のとまうさりの〈言〉初とし　川舟也よりけり
このやとハ思ひ物うし日くらしの鳴ゆゆくれてうちまつれつく
義 のうくくよい集上と女郎花也
所あうけなりうんと　箋 之れありこさりの給いかと前よ女郎花と之
おくしとうくの称と源の入前しなしとあり前よ二年くてとく
御りあゆこそれ前よ又柿本の名前とはあらいま也し
えの会なりく　集のうりせと思ふ源の合也
よく〈書〉うハかりりとおもしらく　同 蝙蝠ノ羽といふく扇と作り
始し前よ扇の名といふてもくの在すよ給扇と カハホリトアリ
和今ノ扇と　秘 風のり平ノとは檜扇といふつかやそれ也といは
られる風のうし　置よりつくかきかりせとりとめなむつと
秘 檜扇ありくし　見
御あとれくの在そうしまつらいさう哥　秘 まつりくハ紀之万葉

まこと乱ノ字をとまりよりとよりあり　花
同御縁に
あさましかりしにや　秘 うしろやすきこと
それ人の手にわたりと　女三の御方の御かたへそ花は源の
御かへりなし　何事も
三の宮の御騒と女三にはいまさらなりとこそ極
時のまゝの御事ありて　花 源の御心ちなやましき事と思へり
きこえむの御文とも有　小侍従か硯の文まいらせたるへきとあり
ほのかにて　猶のさかしらかたりなりとあり
なくさめにくき小侍従か文なり
あれいかにけむ　秘 源の御心の見給ひけるはいかなることにもさと
宰 源の文なり
出させたまへれは　秘 源の二条院へ出させたまひて
何かはかりは　花 別て
いかゝいなりのはさはやと　秘 小侍従か文を
さはかりはいさとくにて文をおもひて　花 小侍従か心くるしさの夜
おとなしくへやといかなんとさりけりしとあり

小侍従も身偏のしれたるにてこうしはすよさ人文をつけ侍り
おとなしのかへりにいことこうなとは物をいひさうかなと
何事かある　秘 小侍従か詞に
合これ奏けしに　秘 くこれ奏けしとこうよ二家はたてゝ引れ物を
いかせ給ひしかとも　秘 源の御出まつりは宴御しまつる
いさとよ　秘 宮の詞に
えなことなかりく　又の御事つゐて此詞おほくなどこそ有か何
いかにそのかはあらん
らんせさらん御心と　秘 世俗よりかの詞に
あれいらし　秘 小侍従か詞に
かれ御こと　秘 かしたるに
はつかしけなる手さへ物あらく　猶ことなのつまれたると
さまてはいたりかうしをなへし流ると　秘 さてけなく見えしかなり
ゆくへなくて何かしからはおもひしる源人とも
秘 手もすてゝのさかりしとくへつきて　宰いつくしさと柏も
おりかしとさらすは文やさてくらうとけなかりのゆくへなるか

すまゐかとりしに宮はや婚く道のかたし柏木の宮
をとこかりし宮中ちくすちけ婚りんとはべるさいしとうなり
ちくうりなりくきこらゆ
秘 若菜の巻也と
源氏の君はいうゆりまうとぬいりしてきとちくうれと
秘 紫上し女三宮のうくうくなるも孫なとさり寵でさうあ御心
宮御ちくさうく
源内いうりれ物と
秘 うれしよりすみまる紀なきへし
女三の宮わうかいの孫と
今はおこうりえて給ふなり
女三の宮中にかれらいぬふなと思ふく紫の上殊しきかた
のを宮なとかうしゐにと皆へ云とうれいゐと
必 紫上は平意なりぬなと
たとへいこられ女の 源の柏の女など不審なおかれと
中納言けりよりさうのてうく
肖 さうの女房たちのをいあやと
うらとくこくゐひそうり
秘 女の大孫などとりてうあり
いとうくさるりよ
秘 源の名点れく心の女へととうききく人道ことを
あをわにしとすでうく廻きことたる女のさうな月宮なりしとこ又
源氏の君をうち勝月夜のうちへかうせれなる河と云なり

肖 逢なりしとをうく云なうり薫なかたちをやとの月宮に
さてをこうの人へなとは
秘 源の宮と
此人とはうしぬれたまをおとくへつきくこられいは女三の宮めに
必 懐妊と
めてうしさきさせ給
肖 源の書なとおさうはなれはかくいふり
へたくなりうに
自然をすもぬなとのうりそあとおりふ
なほさりなきこと
いつまでと宮のあらんをやくき物なとと
必 柏木は催りあるなと
ましてこれは故ことくに
必 ちくへいひのありと
いみてことなりけり
秘 五条后 名順子 左大臣冬嗣女也 仁明后 二条后 中納言長良女 清和后也 通業平中将
花山女御 元方民部卿女 三条院后 通小野宮関白并通信中将
麗景殿女御 三条院后 法興院入道女 承香殿 顕光大臣女 已上二人通右近衛将定
おほかけのさてさうなか
必 ささへくとえてぬ罷は源氏なりき
うくありしえなる義てなし
秘 若女三宮と
源は紫上なとをさしとこまく宮と女三の宮れなかとと
秘 紫上これなりりしおもんくむき
うらくの宮さしかくう

女三をハおさなめき給御様にて源の御ゆるしられ奉る事とそ
女御方の為にハおほしうらやましとおもひしとそ
源氏にハありしと　河 深指之
秘 三方の御心さしの深さにまさりてならしめ
紫上とも　源氏にまさる心をとられさせ給ひおかりしとそ
よろ事なる事ありや　紫の御事と語るハ文一つのたより有なるを理るも
我のことなりとも定めかたり給人に　必 栢木にそへて思ひたる事とそ
花院の御心をとられ給にもまさりしめしく
必 朱雀院の帝の御藤壺の御事とそ
花の山ちハえりしくまへしく　奥州安達日秘不載之
河 いつれも花の山桜の木のまへハいりとへゆかしく思ひ給らん
りくまへしき　源のこゝろおかれと
つれなし給ふり　源の心ハ我方さりし御心と女三の御事
おいらせんとおもほさる夜の御心へハまてゆりと
女君　紫上なり
そうしおかりくいとおかしきゆへ、　必 紫上の御はれとこゝろにてかた

くしくも女三の御事とおりいかゝめかしと　柏木也
御ちハよろしく　必 紫上の御事　花
の御宮のなかやましき事　女三
とくかくり給ふ　源のこゝろやくゆかりの事と紫の事也と
さりし　秘 源の御事
物よりハさらに　花 女三の方へ源のをとろかせ給ふを紫の事也と
箋 今ことより女三の御こゝろへなり
院の御心もとなく　朱雀の今上へとく御覧ありしまでと
られ給ひしておほさるゝとの　箋 花ハ朱雀今上の御事也と語りて也
うめれまつり　箋 端欲正也　源の心也
源のさ御事　前よりまえ地と思ふさま也し源の御事
内のきこしめされしらぬめりと
秘 紫上の御事　必 今上の御膝男子なりとも思しめされたり
女三御はな御事　紫の奇特也
られハたゝしこそおもしろし　花 女三宮の御事
女三ハこゝろへかりしし人のありくいらさせたまへと

きゝ給へらむよろこひ人の為よろこひ申しつゝしきこえさせらるゝと
秘 源の外記切よりことなるは人の助となりの心しきを花は
女王の御心はかりをはかりて所の御ためしきを花なりとて
源氏の人の為なりしは女王はうへきりしきこえなからこと又凡人なとは
何れも人なとのとくやうやと為て思ひ出せんとむつかしきこと
これ女王の御心はかりと御のはかなき忘こと何さけの松よ殊にこと
秘説頗将可察之
花 源氏の人の中人なとはさまはいはなくそれなとと心よからす
お花はとゝりしき女王の御心をいふへはかりは深きなことゝ花

黄ム此行ニ
ト私ノ字ニ
付紙アリ

まさり給はんとはさらさてまつ
（これ時節人（すさこ）花
ことよはまうし
秘 宮上の御付 花
まうさうりかはりて
思ふる御か
秘 宮上六宮氏へくうりゆ
源氏心宮にまかせの人とは思ひなすと
花 かくれなりにていつまてもさありかりん

姫宮もうらみ給ふ夜昼はたかし　箋 花にはもむけはひとけに
家のうちにあることなり　箋 花は無事なる御ことおほくは源氏このうへの恨給ひて
しなかへは女三の宮の御すまひもやすからぬ事と思ひ知りけるにや
院も二三にもしめしつけくて　弄 これ人の身と源氏のことかりしかと
かくはしことなりん　弄 紫君の御心をすかしもすと
いとあさましく　かうしたまふの心
ありかれしも　かとの色かはりにし
そうしよめつきにいは　河 天眼の事は標本ころにも日知
とらく天地人（家はしは知りかなし）　天地照給へは中に
紀夕霧もてくるもこ尊敬はは　箋 不受用
河 楚氏日記紀夕霧もこ此物をみと家のこといのたまふやうかん
花 北宮本月は不用記秘
かすかにもの為をしらく　弄 身をも世の中の為と
花 おそろしくそろそろにきなり
とし比まめにことわりをつくこともかと　花 より源の君へかゝ
見は家はさかるとみれは源は大くに精本の為と

さしてくおりさし流れもするを　　おりくくむきとして飛よおこる

ものゝ本にはあはしさ花として野きりしらいふくこきるの由と

なよりく多をとる手折よなし　られこなれ花のあるへし

いろくやさし夜うきよ　　秘 女郎花と

必 柘本にはこの比おりしいさぬれとくうくこそなしめて

みそのそさ由と　　鞠の時にあると

大ねの名へ　　兼 夕霧猫の時花にてかりせしるもの

ためかくこれあると　　兼 これより花のみ北也

よみてなりとゝくし侍けり　　発 柘の名所の名をとけよ

兼 それめなる女郎なしの所名は大やうしなるかへの始るをとさ

女郎よき侍けり大とうのるゝうかとのなると

世のみさ由と思ふに　　兼 世の中に飛ほとし来るにまかるに

らのさてつ娘へよ　　必 右つれへとして飛をとるくまるそとこ

かの流ことのなるしさと　　兼 懐妊のなりらく

秘 日大うち女郎の所名のとしなるなりしさ由く飛をくれなく

それからよ作女郎の所名の名のなるしき拜みなへ

くおりひてあらるよふよ流けらくは

源の女こへとる手香あはしとおほそと

発 源氏の女こ比といひてあらうく又あやふくよ無しくて流波

うつうへてきさ花ぬ　　必 源の流りのうつこ無為川分面白し

必 無しさのうきこよまるきてなく物あつは又てつひと君とこ伊や

物絶より後のゑりと　不可為絶分

風ん一とおく　　兼 見ゆは面白きこと飛よりも会にはよる事て

宗ちらくうらくてうらい　　兼 みやとこ行のかくく嫁る女郎と

実るすあとはなうきことなり

それしのも乱あつくこうの流合ぬうら　　兼 女郎との中に此のると

必 これなる草の子地もらく

さりこととみへ手と侍りけり

ころうういとかりなうく　　兼 柘の名の花も源の名と

柳とおりしのみるへし　　女郎中にある花と人のふ露もう程の

会おさりもし来くおそらすかな宗そうし

兼 此日おて人流面かりけるすみとて　おのみ妙かとし

女御の御まいりやりけるは　必 何りしれ女御にて
発 明石女御の方へを源氏のむすめにて
答 明石女御たとりよやりけるかりくと宮のしきり
たひきあつかまうく　問 おひきハおさなき人なり
猶をこのきたりとやうれしと
うかりよ人かけ　物やりけるかか人たる人かきを御さる人の
とりいうりかれくくとかくとふいえかけりくきわそとこ
おれおとしめかさこ　必 玉かつらこ
ことくしかり　答 人のたきとつかさ入所のみこ
かくさ人のそりぬかしと　源の人とりを見けしるすとと
一家とふいかけしこされとし猶よ実るすハなしとさん中
ハおとしれ　発 紫の上こ
ハ一院玉鬘の紫の上こ道したしめし所のなすこ
むしんの女房　占 むかかり
必 小弁とかかり　発
ことかくよゆかされ　玉かつらの家とハなかしかぬ所をかつかし

さうかゆかされてく道のかけしこ
今おとんハ　答 女三の宮のかうかいらくへて源の大臣にこ
契りゆかきかしと人いハ　必 紫の上と玉かつらとの契り所手
中よりハ玉かつらの人ときめかとくこ又さうにとこ同かの猶く
みくく人いとく人のゆかさぬこと申ハらすてうた所しとこ　発 答 安
猶ハ院玉かつら人とか見かかつこ
いとこくもるくなりしてし　必 玉かつら人とかこ　発
二条の院給のかんれ君　必 おほろ月夜のこもこ　出発
かくしろのかくて年ことちれと　女三の宮の瓶原の大納言かすこ
彼れ人のハさうを立こしうかく　出 女三の宮のこもこ
答 女三の宮の所かの瓶朧月夜の人よハさとをりかくしてさに立と
立こうし　おりいさ所しかつかみこ
隔よれかいのこと　出 内侍かん君尼よ成なつかなこ　秘発
猶かいれこと如くこ又かいのことなこいつれりこ猶かいの
ことくといふの所かめす
きくかかくハ　源の立うしこかいさ所しみかいつきとし　おか家め

よしさらでハあらはれまじく今一さかひりとおほせらるゝ
いまなりんとし、　[必] 夢刂しおりりしとこ)
阿弥陀の世をとりそこにさうゆんや浄土の国よりそしおかく所し結ぶ
[秘] 此結月夜花よあひみつとし源のとりそよこさしまし二さつや一家
身浄土のうろうハもとさらさ成なれハとこ [発]
[箋] 尼海士人へとり何されゆへそとら結句こ)
さ後くるの世のうき残　源より結くへの久の緒
出よおりひつりて　源も出家の本意なりしと出須来てとこ)
此為そりぬらよのとを　[口] 廻向文 願以此功徳普及於一切我
等与衆生皆共成仏道
とくお源し立よし　[出] 前後の本懐をとけなりつ心の
浄すよの心さうらりなつらしと
[必] 朱雀の此山寺の時うくらしにしるすと源の王命こけの似な [発]
人よハ志なけりし　勝の如来を源の王命くけりつとは尚
ハさぬこての葉末よ朱雀し此浄ハ如来とともあさやより加来り
むりしよりつき派なり　[必] 御ひへ奉り浄り扨さへより此なりとも)

今ハうしもとふりふまし二さ　[箋] 尼とうこあらく数出ぬこさらくかき
うりしあつりれるすハ也くまし二さるれ在りハとらぬといへり
常ある手本をとハ二家のとり　[秘] 文の趣と
[箋] 是ハ朱雀の此るのこと
おもハれぬと此なり殊うりよなりん　[必] おもハれ如かとこ)
[箋] 世の本る手ハ二家身のとうとこそふよおもハれ如かと源の結論
ハ今おさとといつつ
空なり　あのしれすとこゝいでしはおといへり
[迎] 結月 阿弥ふいうくハおりいおもハれは毎何りし此浦よあさりせし君
[必] 明石とゆへよ明石よりくハそらりはつめこ家身承よう前後にさと 奉月
[秘] きよ為し為よとされのすましきる身なりこ家ゆへ行きしへ
おえしさらりくハ前手二方よおもハれ如かとこ
思うりよのハあまり◯こさらにすてとと（とく）　[口] 阿まり◯こ二門とみてく阿弥ねき
かとしハ菩門示現の色こ展く阿まり◯二さ廻向の色こ
形なこハあまり◯こさりとしとあり　普及於一切の色こ

箋 廻向ニハ何事もさきこそよろしけれとて男女公をかへの心にしあまた
いつくしきめさうそ
岷 御をりかけ源の人よ何事のさへ公を給ふおりつけ
私案し御の源へ下りよ頭ハ公事にて同事頭
兼ハいつくしなりんといふたて物の兼の
たきこそあさしめつり　樒と
発 朧月夜の兼ハよし〳〵と
女君よりもいけハたえしめり　必 かりそらめなれハと
いつくしけたなりし也
発 かくれ候ものと源氏の御家よをとられしたる
朧月夜の君とも思ふよこらむ頭心にて御家はかり〳〵と
必 けふのつらしと
きよ公つきなしや　必 皆ゆめにそひきかの心公を給ふしと
秋比と此君と　箋 樒秋比と此君ハ朧月夜と
樒秋比御家のつよきうらみ思ひしをく故の給ふとて
うらめ人のえさ夜
かくれそらしきえてし
かりおりよさ給ひけ
必 秋比かくの貝女ハ給ひけりしと
発 樒秋比のつよし

うくおりよみちの樒の秋比の御こと
りんの君よさ夜かけり　必 御月夜と
まさふかなれハ　朧月夜の尼よなりけりとしもめなれ
ハそのうち此女房とていまうこ載給ふしとこ
箋 衣といふかはしくおとしろ
きよなりとハいつよかゝりのそ
河 東宮切韻云 釈氏云 袈裟二音 俗云 計佐 天竺語也 日 袈裟
衣又切 悉名 涂 壇 三僧 法衣 即 沙門之眼也
花 むつし此尼のうち出きさりしいつ頭の給ふのん
六条院りんし此君　必 なふちの里こ
かりゆくらちてハ　河 清眼云　私云一字かなメクイ云公也
必 何まりよ世とそむきてやゝ小まゐ給ひしこそ
河 作物所
頃くもとこちのへ
秘 念仏西方へ出かゝし 調度此分のなれなり　発
箋 尼の具ハ思ふるかけり白く給物まてまうき給ふなりしとこそ
御ちとれうし也しろ屏風本け　発 うハ也しろめ給ひ

よそにて侍りしく　発 是ハおなしことく御有さまかはりたると思ふと
山のことくの御覧　兼 始めく朱雀と山のことかはりしかきり
八月廿日のころの御こと 脇　必 葵上の忌月と
発 夕霧の母葵上の忌に夕霧はらいの御かたと思ひおもふまゝにと
くれのみ　兼 夕霧の所のそはに
中月ハ院の太后　秘 朱雀の母后の御忌月に 発
弘徽殿太后に
十月中とおほしまつらるの　御堀十月中とに
姫君いとなやみ　発 女三宮に
出つる月の御はつかり也　必 落葉宮と
それ月より　発 女二宮落葉宮に朱雀院の御堀なかなか十月に
おもひきたりし　兼 秘仕太后と
りんの君をそれつるてよ　発 柏木朱雀へまゐりまゐると
必 しるしの出かと出給なりしと是と次てよ出なりしと
宮にうつくしく　必 女三宮の懐妊のさ夜に 発
院たてしと

こゝにしハまゐらせ給ひかくて　発 紫上の病気なとにまゐらせてと
兼 行幸とのなし　是ハ朱雀の女三の懐妊とてかくおもはる
御山よりもこゝろしく　兼 朱雀に　女三やまふと付けり
らうたくおもほしと
月ころくさりのかくそてつりのおもふまゝに
必 院の女三のうへのうつくしみなりしと
是より院の女三へうとくしまゐる朱雀のこゝろなく懐
妊のことなとを御心に叢ぬ立てすとそれと思へいひ延てる後に
いかのさ心なりておもひなかれる　紫上と　紫の此の時分ハさかれり
とりなく女三へうとくしかりしといふ朱雀をやせてつれおもりしに
さてハさやかに此時分いかなかるゝをもてく懐妊あるよその
まうとくしまゐりし御殿命にらく哀しかりけれ御と
らつかりなとのこゝやいとかりし御へさ　必 朱雀の御心に内裏
さふけ女の宮の宮のらへとさへさ御くわかりのかりのかつれ給ハまし
て二条院よ院のまし座にて御いとまたいかなるまいと御山に行給
発 朱雀の御心世の人へ禁中なとのまかせとハ出かなとと

箋 これハ中宮亮なとにて頼く内遥亮なりし緒といふへことにてたくとこ
細 うやひといふ狩伊勢物語より是は物語にハあまりにも所々より
日本紀に風俗ともありうやひりに意てやさしといふと
私云 箋といつれしよくりあへ見とて須門よりの
うやひとハ面むさきとの為にはりしあとハくるしき物中なり
人をうたかや蜜遊なりとの為といひなりて虚ちれともたとこえ箋
内よりありとのうやひをうつりけれ定つらいへ小会となりしへりといふ
入あれ綱を会と面りてくうりへさこと

こ夜やうあかさと　世すれ共は捨ぬつる末摘花なれともし此の后
おはおかれ捨なと也
少 此は子のなと
おとしれたうし帰て　須の女三の方よおかしこく末摘花れ人もとよこと
それとしなくてく　細 末摘花の為の絹と
年月の立くはなりん　箋 末摘花の花よりいの末色こきよしと
世中さりしく　箋 須の探意あるとあくめり也

箋 少いりて世中さりしく世中れくれくあよ与を切く後へとゝく
いとくちしく　秘 須の会意
箋 末摘花のおほしめしれ所なる意と須の思と
河 是より源氏の君会こ
とハうりおほしつきらく　忠りしくこ会しこさうりとハ末摘花
忠凡しめうらく須のそうたうあかとおほす所と会話らくなつけかゝ
これなうりをハ　源氏女三の事へ中り紀と
会うりしきあせしそこにまいり　須の男ってて面同あも速
と也へ後れる為るたちりりようと縁すハなりりし也とゝ
末摘花の所為称須の出あめよ迷ひなりと
あつりておかりいしょ中なり　箋 須の女三をいつしさあるよくふ
こともかとし面よ随思せしとおりおりのそとと
少 柄のことをもちとまりたなくのかつり
そうらいく　女三の方ゆこ
ねたりいろしあつ　息 くれしとくなり
いとおさりれなけれ会たくへとこ独き　箋 女三の会おさまれくおりけ也

朱雀のミかとりのかたく心くるしうおもほしけるをうしろめたう思ひきこえて源の御事を
いまよりはちかくうとからぬさまにたのミきこえさせ給へ 必 又いはゝやくれなとちかくあるへきことを 箋
私 箋ハ柏の事をおもひてかくいへるなり
かくまてもいふへき事かは 不可有事といふ心也 いとあはれにとも
うへの御心よりいてたる事也 花 うへは朱雀の事也
必 うへは朱雀とて也 女三の御事を源の御心に思ひよせて
こよなう御心とまらせ給はぬやと 箋 此子細朱雀院へ申させたまはぬかと
小せうとかたらひ申さるゝとき源にもさやうに申されしかはまことに
さしてもなしとなり
いはせ給ふは不審之物の思ひわつらひ給ふ事也 朱雀院へ申させ給ひてと
けれとも不審なれはかくはかなうおもひわつらはれたる也 必
いふかひなくかくおほしみたれたるにと 朱雀の御心にかなひなき
人の御心のうちにはゝかりきこえて柏のかくにふかく思ふ
花 朱雀は源氏の御心にかなふやうに人の御心に御後見すへきとおほしめし女三の宮をと
宗 女三の宮の御事をなにかとおほしめしつゝいきたなくてそのほとにかくとも
ありけるにおほしよせたるとも

私 朱雀といひつるも箋ハかれらちかくとは女三の御ことを源
の御心に思ひよりて人の御心ならはしにちかくあはれなりや
ちかく御心とも箋ハ柏の事を思ひの事にもちかくよろしく思はれ
ちかく人の御心ならはしさりかたく女三のかたは源の御後見をとて人の御
なとかくまても源の御心をうけたまはりおはしますと 宗 かくのみか
又いはせたまふ事にてくちをしきことにすは
宗 さてこそは御心もちゐてかはらぬとこそ 箋ハ又源の一家の身の事と
必 源の御心よりかはらぬと女三の宮におもひよせたまふ
院のおほし出させ給ふかと也 朱雀院
箋 箋ハ朱雀の御存生の内ハ一家の事もさりかたく思ひ給へと朱雀院の心
ちかくは源にもいはせたまへ女三の宮さかなれはまかせしとおもほせとも
さることもとなをおほし出て しかれともまたいかならんとおほせなく
源もなかなかにまたもおほせとも
いふへくもかたい此の義 宗 御心のうちに
必 女三の宮のおほしよせて心ふかくおもほしたる也
たゝかりそめにもかゝるへき女三のことならんかと 宗 かくのことに女三のことをとは

みこのまれすといつまてあさくは侍るに心かせをうけ給はりつゝ也と
私裳着の義なりさたりなすさとは不ふかすゝめへきなりと
秘 楞厳院勝月房の事也そうけたまはりと
いまはとてはなれん世のうしろこ
秘 女三宮をゆつりたまふと
花 朱雀院出家のこと
源の出家せんする身にはまことに有りなかれとゝ女三宮を朱
雀の院へ心をはかりて延引ありとれあまりて
ひきうけ給　朱雀は世をそむきて出家せんは女三の御為いかにとも
心くるしとおもひしへきと　箋 後世をうけとられぬ御わつらひなし
はなしとて併女三宮は世をそむきかねますと源の宮ふた
行末もさきりかたきたれと　箋 此君女御のきと行末落着なり
示ふしとは源の用捨のこと也ふこ
ころかれ世ふうまのとけくいと　箋 源の存生中は不とふてふ
条なくはと行末まうくはありてれと也
をかれる　立こくへこ
りうもまよりたてんこと　必 はふといふはりは家にりうしに

出家してくとおもしうめ年ことに女三一人へに心ともまかとと
私出家とたちれまりそりうことといふかなし帳にて此宮とさあ
望あらし皆世をすてゝともおもしうめようにいてとと
やうくさしきと　心のうちよう角立すのたか義也
院の御世の終とも　花 朱雀なりと
おもりほうの御名の　箋 女三の事と思いれのかみ御恩あまりにと
ゆるく朱雀の御心をみやましぬなへなとと
こともと何かに　朽のうへなりとそとと
つこいとおそろし　朱雀の御身斗あつは女三の御寵よありんとと
そかとくは　柏木とれなしめいりまのまふあるへし
源のことおもひつくりまさをとかれに　女三の御さた申と
これもうちならは義給のく　源氏こ
箋 源の勝院の御きよ所々ともさかてはかふ台のおこうんたゆえと
人のうくまくともりとさしくおりいりからへのさうしらよ
必 若菜くへを源をむろうしくそといと　進止万葉
若菜は源のさうしらと吹あそしよ今す又ゆかしれすや宮そとと源氏

身まかりなんとすてそ　箋なくへかのさしらるへくと無用
なきやとふと昔は源の宮にありしかいつしか身なくなりぬるを
身まかりなとはおりしろくりまかりさりしらは加ことにまかりて
うけ給はれ給ひつらん　これもちとかくりてのみたまひ
うけせさせてまいり　必院への御使ること
御よめとおもいき　女三の御さた事と
かれこ夜のおはりし　秘桐壺への御使者には宮へ御ゆきのこと
気りおちらんことは　秘御文の使　私箋は文の使には何にも
御気りなきやと女三へ源の宮へ何とせよなくそへかり
二宮の　発藤壺女御と
うかれしき御身さ有まりてく　懐妊ある比はおとろへ給ふと箋
発女三宮比はおとろへ給ふと果下し
たなるらんか　おもそらんかなかと
露月ならつり御三月
御三月とはうつりとは朱雀の御父帝の御三月ところし　発源氏の父へ桐壺帝　中石

御ノ字有義まゐらせ給ひし　箋
又いとしこそ御事ろさ　私懐妊の御事ろさこと
いとしは月のかさなれはおとろ御彼のつくらうつりくへきを御こと
むつかしく物おもひしこられを　女三へ源の来訪にされ　中石
屈よりは宮へと也さ比ようよいとおしくてうくのみつこ
いとらかうしとされける　箋さはかりふといつかおもひけら
ゆくへありくへき　うちやうれ時にと柏木はまつよえおつへきへとこ
人おやしとおりならんと　源の心と
らんよつけてとも　是はかしこくまれ源とらんまれりとこ
秘女三の御事りとうれ心よおもれくとやこりれ給りくへかんとこ
発源の御心をおもれくとやらんとこ　女三の事り源氏の心と
あんまるこ又　是は源の柏をとらんまかりとこ
月比気りなりぬをとこうかなし　源のこうかおりかこ
院よりこ御おもらはなとたり義　必御かとたかやこまかゆくよ御ほ
なとことおもふれは御身なとしてなきこ有ほとんくはさへかと
大将の君そてたちやうしおりことなるへし　夕霧は比桜折やと不

夏によむこと猿の時より冬にさしゆへこ
たまかりのはさくめく一数字冬よりしるすおるあいかへきにて
(抄) わしいふ本のうへこ
(発) 字冬よりは猿の所と　夕霧は冬に柏木の女三の宮へいひより
う宮を源なしの志うしたう宮かといふうたより弘けり女義
もろくとは実なりまとまろく行んとは夕霧の名ひらうねと
(必) めくおりたくとまうくはなひらうさ給と
さうくよ
(発) 夕霧のむらちの宮のうさまうく相手しあふよくて源氏の御方の
るまたと院御らしおつつうぬるまといいうり此一行御たうへき脱く
秋発ノ義稍いうしとおおるの秘ノ義後へし
十二月よおりよゆり十余日と　とゆるあまりと読へし
(発) 御年十二月十余日とて
朱雀は御極院好みりゆくへまくく乗来給ふし
二条院のうく　(以) 黒とと帰りいて
える河めえとく　黒らと此式来によりきうめえて
とくゆりのふとなり

女御の君も里におはし給と　六条院におはし給と
此ゐひのかんこ　白鳥や宮と若菜に一巻の見こ給はおりて
若菜よりは弟よりゐり宮に此また此ゆり挑節と不審ふ成とて
此宮の陰宮のあちりし此中宮殿と　兵白宮と二部
此宮の前中より永正九五十九宮庵にて読あらく此兵
部おあこ　柏以右の女御御庵のまとはうかれしく庵後に
二年まし六条の院におはりけり中にはりとなくとさうおおける
(以) 次も紅陽次庵と
それくはにとおはし宮まうく
まかるよりりの君みて　源の御宮多くへし
きさくよ右大臣との小宰　紫の上の小方ますらうて
大将の君うしとなまうまうく　大将は夕霧とうしいうの御所は
てりう此やう
(発) 花ちる里なり　相手と秋の紅なん小は相手の院まといひけり
うれ御たさとは
花ちる里のうへと
おまへの北むなかみの
(必) 花ちる里のうまくまうしあ
ゆくへり式部乗りなにはいへりうまさ給と

此つ緒をとられ、よのおもひさましらハせさんとて
箋 これハ世よのつらの人をなくさめりわりようしハ本のまいら
さらんハ人あまたともあへ笑給のさまにも見しちく女御の
姫宮ふくむ時の人なれハきくさやうにおもひへきすと
おちくまゐらふとうし　良き所劣れよりし
ならうしくおほしく　源の御心と
とりさうれく　秘 あしくやしかすと
父おとしと　数仕大将と
院おもひやりしめさんとて　字源氏と
又朱雀院也
まつらんさらめなとて　柏木のやくまいらし
まいの字ちかれとこのうちよ
源とうしハ本と常ニ女中にかよひも心と
なよきてうしゆしようりよなり
ものれらすおもうし　源ハ蔵中をよくあいきつひかすと
あやしく小　如しさ本のさ渡と

まいとおこたりけ　必 あやしくもこそあらうよなとしハ方義人と云と
つしかきやりうかると
おとうとれまうち　石梅れ大将なと
いとしきりめく　是れ是川めさ前さ度なりかくの男と理
加へいお弥なり
なとのはへてこゝうちの　鬼女よなりへくともそめへ弥とし
女三れ宮ゆへ源の心よおもいうら隙と
きかれもくいとおりいはりき　花 源の御と
秘 不存のかなりうんと也
箋 女三宮と柏木とのなりと
そむきくなく　何しさなりなくゝ心くしく萬面あきこと
念これひやしさの　けとのると
宮よりのし　結句これ不しつらり渡つり
秘 女三れなりと説と行いひあしあと猫の様とらん為めし　必 女三宮の所かみれなりと字
箋 はかりと朱雀院出家れ前よういはれと
後きくとしこうほり　秘 此心と　仏月とよさりりなるすと

前にまうけりて月ごとに縄をもめり
としをせめ給へれハ　　月迫なり
おもひのごとく志あへくて　無く源の告くうたとくハ前しとこ
いとゐれ給ふら　　出家するくまし源氏前といへり
いとゐハ精気と　　お家する出離を用ふると
家におい出家　　源氏の子孫と　源の子孫一家なりと
出家なりす多くしとて
心いめくうしきのくくなりん　　絶ゆると柳なと須へおとさ絶
人なりてさらひくはしつかとれのほとさて月比の体をあり
述懐とそこあらさりまけるかと
うかれ多あふつらんと　柏木ハ癸巻におもりよりうし源の姫り
給ひあつうらあくれのかとおりし瓦多とちうしこさこ
月比うるくよ　柏木ハ嫉ろうし其妻女の六の所あやとと
みさりうくひ在ることいふもの　　脚氣なりし事
順和名云醫家書有脚氣 俗云脚氣一名脚病 俗云阿之乃介　うつかれ物経ニハ源中
納言源将にまゐりかつくみうりくちやかいさりけりとそ

業之ことうりハ病の熱あることうりあらし世俗にいふ二条家
ことうり風なとあり
出 うくのやしハ癒病脚病ハ夏気なりこうりハ出入くて病の
なし血気の乱てく病となりあしまくまく物といふるあす
と侍りけといつかハ脚気のまとしまし侍り
出 脚気といふ其病の病名に似つさうかといふる脚病あし　出
院の所よろそひいけり　　朱蒼に飯五十歳也
人よりさこうまうれく　致仕の所望とをさうしこ候ハと
胡家の出仕とをせぬ人あれハ辞状あるかとし
かしゆりとうけ　　　出 掛冠なりと端にあり
車とおしまゐ　　出 言文孝經云七十老致仕懸其所仕之
車宗廟示使子孫監而則正而立身之終其要然也
漢薛廣德爲御史大夫乞十月免歸常大守延之界上薛以爲
榮懸其安車傳子孫 師古云懸其所賜安車以示榮致仕懸車亦古說也
給く所なりし　　　出 致仕の大臣よりを定せんとあへしとそ　正本アリ

秘 致仕大臣にせんかたなしと云説ありいかゞ只よりどころなしと
いふなるべし　私秘ノ義よろしかるべし
ちらしなりとておかしこと　柏木の事とおもふこそは
同事と同し如クと　同事ヲ云也
りよりし申さるゝ　致仕の心もしめゆるしと
おもきやまひをわひて身のはけて　是ハ朱雀院へ女二宮のまいり
たまひし時のこと
河 今日正国天又暖　可怜枝病暫来田　白氏文集　此詩不及引之
いけいはよくはらのさなかに　弄 朱雀の事ハ出家してあれ
しけせハ大臣ならと首略せられて給へしと也
朱雀院御山住の所をとよく知く申さるゝと
いかめしくきこし召かたなりと　弄 女二宮の御かたさまのゆへと致
仕のおとゝにとりなしはいひなして女三宮の御かたはれてつきなりと
たいめしくおもひつゝのと源のらうたきをめでゝ　弄 箋
まとかくなんとそこらの夜はわの人をかさなるへきとさい
いへと思ふくりの橋もなくにされたれともいふ所ノ心侍り

弄 あはくなんとて源氏ノ附昇下ノ給
秘 何事も首略し給のとくいかめしき様にとりなしみえたれハ
よく細つきとし　日さればよしと返されハ一そ世のかにたらぬ所かた
ことくしくいはなるやと思ひし
箋 当日を首略しとりとて人の心のをえんと思ふことく
おりつくまあくこ御事ハ柏木の事そはとわかしさせて左柏
木もさはかしよことく　しかおなしやかとこ
弄 女三宮の御かたの事をそとさうか御心うらしくもあきやくしよ柏木
の中にふとかくらしとしてゆふしと思ひあける
私云為ノ義いかして争かくなんとハ柏木にも中のみやまよ
源と思りしてことぞさきうの用意なりと思ふ人のごとく
あそうへ無の菜に在りつくるか首略しかの身へ
御くらうへきとこさはいへとも知てとハ柏木ハ首略しゝか
ハとりかんとあへられつゝかか処ハ源と同じなりつゝこと
そ外と柏の中さ御ハさらくハ柏もことくしき事用意なる
らんと是ハいかにもならてハ世の人へ思ふらん所をいよく

一 宮こ有男は月ゑにせまうしてきうゐもとし今おもひいてめくと
の源の羽ともいつり　　源の羽と
ちねるとおほやゑまきては
能儀ちまの亡は夕霧ちやうしく極しいかきと
りとりりし御わ　　亡ふそ御かけのと
かの院何けりと　　私 朱雀院と 花
亡もとらひありぬ結縁に漁しいめつりとこ
くわさのこと伏　　朱雀か しらく二未居もと始とめして
ぞうし出てきうのやうあれと　　朱雀世と捨のへまいとこ
二未居るとは三代のまうしこさしとこ
かのちねと己ろとちぎ　　夕霧と柏木ともりのとをまこ
むのしといふりのはさうしてつつこて其りり　　地下後へみとは
さくこ公役なりとのやうふしらく何れも男宗公つ公のさき孫そと
うけしき祐りう　　柏の台も源の御公さき孫とそうこ
源の公ねるとめなりけり
ひんうしれおとし　　花 いなちう置れうこと

みくおこなりいらしく　　かしこまれおこなりいらしくすへて
夕霧れほか翔へかつか示へ柏木れおそしく拾是先生へ必とき
二未居まは源の宮へ公かやうまよらく其しらりへそとき
いとくるりまへよろく　　しいまれ二未居とおもてい行り
れさこく柏に路らんま　　識示れ日わあれと明石女御 女三宮公ぶ
といとい源まてと汎つへ内あれいそふるいよくまいれさうさく
おもよくとしれへらりしとき
られ汎物の日は　　当日れさうれくとらかかりのらくりすこ
ありまこまへつかえくにま云いそあれ下りさこ
同
赤白橡蒲萄染下襲
又
寛平七年陽成院七十賀舞童五人眼赤白橡蒲萄染下襲
分きるあ路見まもいりかさこ　　青色麹塵也　穠芳童也
くて両示して
仙遊霞といふものの　　院よくおそはきは仙内ノ公よ此示アリ
同
仙遊霞太食調曲柏子十六舞古示小曲南宮横譜為性調曲
雪れふくいさしうち南ま来れとありふく梅の宮を冬らりかひあり

てかくれたまへり
　　紅梅のおとゝなりけり此君とはいひけり
のちにまたかくれにたるには中将よりそむかしのうちの
よかはのよとかくたゝ女の子をもちて家をおもしとおもはく継なれ
ひとしれぬ方のかたにおはしませは
庶の筋中よ源氏おほん御門のおほん宮家又右のおとゝ聟
君なといひける御よの人大納言以下は此のことをはなく
これはしなと　　　　竇庭に
右の大殿の四郎君　　　　髭黒男子玉かつら腹　　蔵人右弁
大納言の三郎君　　　　夕霧子雲井雁腹　　蔵人右大弁
宰相の中将の君たち二人　　　　五世のおほんは源氏とて也
紅梅はしたの弟の君たち蔵人は源氏も童なる時の母方の
大納言のおとゝのはらの二郎君　　　　夕霧二男母藤内侍蔵人
中納言となりけり
式部卿の宮の宰相といひし今は源中納言の御子
　武部卿の宮　宰相　源納言　式部卿宮の子蔵人若君とも母方は源
右の大殿のゝ四郎君　　　　髭黒男の四郎　母玉かつらの腹の蔵人

右大将のとなりけり
大納言殿の三郎君　　　夕霧の嫡男母雲井雁蔵人右兵衛督とも
これもこの君たち　　　源中将の弟と蔵人少将
ならびにしなきと　　　　惟情なとのうへ夕霧柏木なとの後にて
なへし　　　　　　　　　　曹司をもよろこひ
これまでをおほしめし　　源氏と
わかしの院　　　　　　　かしこしといふ親よりもさらにのこりなく
なへなきことにて　　　　　あいなくそましてあるらん
あいなきことのそましてあるらん
またその中の院をそいのかなうましくらりしてあいなきにてかはかなし
うらなるなからいのひとかは源のあはれ雑事にかなよ物語のはかり
いかしへの古の勢家も又たききはの物おもさにけれはれし
　柏殿かりのとのせに家にも載のかく次てに記之耳
薫中書なとしめく　　　　柏木かくれ給
　あかしなとも義人をさして然とあらはにあらはした事ぬ
人としもとなり

私 まこし給ふへく覚えたなり
いましたらしなりけん　　発 柏木もやうやく思ひなりぬ
さらさ夜にゆられとし月に　　私 不及引合
ゆらさ夜に年をゆられんとりともおもてたちかへりいやとまるる
人よりもりまかしらく行しく　　是れ柏木ハ実ことしき人なる
よ唐に源へ官公のりたる又不労をかしくて宿木のたりしる
さと給ふと涙にしく君のみへに源のまかなてしれのまて
そうたいおしたく　　源のそら辞し
源の辞さうさ夜をしたくなりかくれなたんさうと
いとくむのつかれく　　うしたまれ給ふに恐怖なりらくへり
くれなみそむのつかてしと
さりしさそうりおらく
れらんしとしめらく　　必 病ともれとなりぬと
たらくかへに御を　　源のとりる手病とたいのまと
まうくめかまうよいと　いてくまとかく　　うしいまれさ夜とおもうと
同 明順年呪祖後一条院之由雨堂関白聞給召明順直問給明

順帰参吐血死云々見栄花物語此ホ之例也
まいのおとろくしきこそいまもおりぬと
発 うしいまとこそありくしいまいとよ辞のみとなり
私 右の辞かとなきふりくなきを不審に候也
たてましと物をといいつりよ　　源のおりまく脱してうくなきなし
給ふうきこえく柏木れ家とといひ給りまて
おとし母ぬのきさ　　うしたまれ又母さらと
よきくふらく　　一条院 藤壺宮 雨方 小まし御心とらいかてと 発
とのまこゑうし　　後任の大方のうへ柏とといとらりまて
女宮のおかしさりの　　必 藤壺宮也 発
給ふれとらよおいおなのらし　　必 此旅ハ行末とこそまほハ後悔也
箋 平生おとたいさらゆえしを後悔也
まうれしまりへきかしてまやと　　私 統御在引合ふ及之也
うち物にれ好うひちとこそこひつくかハ空りれとてありぬり
ようしけあさきといふしとこそ
母うや出雨　藤壺宮女母也 発　柏木の給也

世れとしく　柿本よのゝ世へなり　発　数ら中も不の詞と
世乃れなりけりして又世のこと見句縁ありけりや　よれ病気
あるの時は其以ぬ事ありて公面ちくてハ有ルなりけりてこ古の事なりと
ことりや　秘 しちまれ世の事　発
箋 柿本れ公　歩月之　又美子枕乞
秘 柿本の公御へしとし
叔ありぬ身まて及ひてらき　柿本ノ羽申女ゐてまり申せハ如く
申し絵つと
なりて在よ給て　申女ありとゆのきつりしりハせありて
氣しらて安倍としてニさうめ人へすりかりて九らんとてきゝ
て存命不定すおかれハ柿の濃切の感として元ありハさしとてなる
とく申りて年ありまと　秘 しちまれ氣の事　発
命あとゆりんにとはうてこゝをつとせ
元打面ありしく　発 女君とゐてハ元打面ありてきこ
又公中ましくハ元打面しとおらしてやき詞と
秋今生おちと申りして実連へハ元打面ぬとなり

又てくれ中ノ方　秘 しちまれ世と　発
まハなつれ公ありて　柿本れ世の例ありぬ時こそ柿本と家
たてれもしてもとうは何とたくおちくおちれ有そらと
又いとことりあり　存業の世声負不の事を理りあり
有ま又ことりなりとうけ言
人へうのされなりけり　秘 如しちまれ嫡子なれハと弄器
致仕大臣のしハ本ハ嫡子と
とりわきて　柿の世傷の事しく電子ありのすと柿のはの詞と
いまハとうのを有てきうせ給て　秘 存業安へ申しされてこ
世ゆくおちうの有の在上　鑑 瓢　史記
物の陳慨ありて公とこ安くとともあ業とと
なくくまてうり給ぬ　発 致仕のてくかしてまハことうり給
安ると申り給て　存業とこ
いとちうれなかりしなとてとうゆ　柑子ハ毒ありしとて
出 業益扮絶よ依理病悩の事といつの事ちをひとつりき
こうしめしてハ所身すてもとしめれといへり

日よりも忘よりりも
いとしきおやこらの　日よりも忘よりりもとりく会れふと
うつひのつのまつけくいよくおしくけむしくおりふ而と
六条院のを　箋天下の為よおしきんへとこいのよ衆ハ法の如し
殺伐へをとつひのすつと
あ梢るまししく　夕霧ハ柏と引しく能中ありハ一人ハ殺害法と
沸堺女あるよなりりよなり　箋来荷ハ内堺入十二月廿日あり案り
うゆくわ済しれとくしきこハつくあるれ物と
私此の堺の戒系の時と霧囲よ出く当日と晒しつまめの此
而よ当日の舞の帖衣系と戒系の処よ何のくとうあるの面
面んしとあき正延和　殺伐の一つる無殺の時分と云
あこうしかとまへの不労なるの時る用捨ゑへきる事なれし
此沸堺の寂を逗りしくる内案のなりしと
つきくよとしこありつの　秘月とこ　私沈と細りへききも
女家の内会のもつとそ　女こ此るすと
秘女こ家のとるりかれ大家よりくみこつの而よ来く陣星るうと

史女この会中と法のおありと
柳係れるりとこりハあめと
まいのあ千るの内補陀又かれおたしまれ内るうとも給ひのさるの
秘五十寺五十ケ寺也年之數也おたし御もるハ仁和寺也
河广訶毘盧遮那毘盧遮那舎那如歟　祀法新意云保七歳云
天武天皇四年始於諸寺補經ゝこ　李アヱ紀云延長七年九
月十七日左大臣忠息四人共於法性寺設五十賀每含其儀
本堂毘盧遮那如来像ゝ
来荷忘五十之沸堺あ八あ千るの内補陀ゑとも芝居ノ例と
广訶毘盧遮那ハ大日と彼西山の内るあ千るの法つとしてゝ十
一日の内補陀ゑとも彼内るの内なるる大日あかりしなりり番り
よめとし御りうの寺まうゐてハめつくしき柄ありとして西東寺
うりまや左ありあまとらつりもゆくひの会のといつり日稀と
の八字まりく新来の会こりのこ　此字よめつくしーうきよ仕りく
茶服杉名とよりも柄とれるりろとも加へうり皆ハ万葉ノ第こ而こ信用こ
一説云五十寺一寺ノ名こゝと芝又来説こ一寺にくハあ千内堺る経あきこ

注 天慶二年十二月貞信公六十賀大政官於六十寺修諷誦
永延二年三月十四日法興院大入道六十賀公家今日修諷
誦於十寺
今御薬師賀の時諸寺に諷誦は年齢の数を用ひ給ふなるを
六十の賀なれは六十寺まてはえ諷誦せられさせ給はて
仁和寺の御堂にて金剛界大日なりしと云て六十寺の諷誦をせさせ給ふ
てハ又仁和寺円堂にて二ケ阿闍梨会那の御諷誦をせさせ給ふと
此僧綱奇特と彼おもひし御ひまつりけれはさそれの御修
法をとりの（ま）弥勒のやうとりやう修羅法ならむと仰（まう）て
注 六十寺賀よりもおもひし御とを仰ぬるハ仁和寺に准とて仁和
寺の御堂の本尊の金剛界大日にまつりつかさの御事と行ひ
ゆゑと云をおもしてゆゑと也と見えたり
此僧綱ハ本寺に修してありし僧おほくて不載と承る
後漢書 注 民僧韓康僧公是韓伯休那とハ那字同下と
不論ハ物経ハ不如僧と僧綱とをさしてみなくく云（手）遣云行り
さしいて候とよ申（手）とくりやうしにりありて云ハ何りとよ

家しゆゑの
注 吹ちょうしは北風とさしても秋は秋めくこころの
注 韓伯休真吹ちょうしは北風とさしてし 此書と一師を申り
韓伯ハ有休商人にて物をとりつまるにさりとて経ありねハうりさり
あると云ハれとも人のいふ事をきかり世ある事を韓伯休那といふ
二那之字文章也
又形に猪のはに物称に 般若心経大般若経若又阿闍梨會
那なるといひしく一部て般若をよみさまつりのさされとしてく
般若なともうつ河あるくり事の二さまりつかさえとなと
秘物しての筆為後しし 僧綱のありハ法儀ありくとき
こうえつのありてとめあり

注 奥へ注入ル分

人の市あきなひとて入つて

朱荷術沛 出家之後ハ花をうりけるとかや

同 韓伯休事　韓康字伯休京地霸陵人常采薬名山賣

於長安市口不二價三十餘年時有女子從康買薬康守價

不移女子怒曰公是韓伯休那　那 鄉 餘 壺 乃不二價乎也乃嘆反